貝塚市埋蔵文化財調査報告第28集

三ヶ山オニ谷遺跡発掘調査概要

1993・3・31

貝塚市教育委員会

三ヶ山オニ谷遺跡発掘調査概要

1993・3・31

貝塚市教育委員会

はじめに

三ヶ山オニ谷遺跡は、今回の開発との協議の中で新たに発見した遺跡であります。遺跡の立地は近接して山城が存在するもののまったくの山間部であり、遺跡の存在を考えることは不可能な地点でありました。

今回、そのような状況下から新たに遺跡を発見し、山間部の歴史の一端を明らかにする機会に恵まれ、また、本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助となれば幸に存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係各位には多大なご理解、ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

貝塚市教育委員会

教育長　福井昱彦

例　　言

1. 本書は、貝塚市土地開発公社、貝塚市役所総合計画部開発室、市民生活部墓地整備室、生活環境部公園墓地整備室の依頼により、大阪府貝塚市三ヶ山地内において実施した、貝塚市公園墓地建設工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2. 調査は分布調査から着手し、平成２年５月21日から５月25日にかけて実施した。遺跡確認調査は平成２年９月３日から９月14日まで、平成３年３月13日から３月20までの２次に分けて実施した。本格的発掘調査は平成４年１月16日から４月28日にかけて実施した。なお、内業調査については平成４年10月31日に終了した。

3. 調査に当たっては、地元関係者、貝塚市土地開発公社、貝塚市役所より多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表す。

4. 調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一の指導のもと、三浦基が担当し、上野裕子が補佐した。

   現地調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

   梅本輝雄　　河瀬圭輔　　清水久子　　下中良仁　　下中理絵子　　田代自子
   田渕広巳　　辻　栄子　　中辻澄子　　橋本　淳　　藤井記代美　　古家拓実
   堀　和憲　　堀内計秀　　森村紀代　　山本一吉

5. 本書の執筆は第１章を前川、その他を三浦が担当し、編集は三浦が行った。

6. 遺物写真撮影は三浦が行った。

7. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

8. 調査、整理等にあたっては次の方々のご教示を得た。記して感謝の意を表す。（敬称略）

   水野正好　　森村健一　　仮屋喜一郎

目　　次

はじめに
例　　言
目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

第 1 章　調査に至る経過 …… 1
第 2 章　位置と環境 …… 3
第 3 章　調査成果 …… 5
1. 調査の概要 …… 5
2. 基本層序 …… 11
3. 検出遺構 …… 12
4. 出土遺物 …… 25
第 4 章　まとめ …… 31

図版目次

図版1　第1区
　第1区全景
図版2　第2区
　第2区全景
図版3　第3区
　第3区全景
図版4　第1区
　1.　遺構掘削状況
　2.　同　上
図版5　第3区
　1.　遺構掘削状況
　2.　同　上
図版6　第2区
　1.　調査区全景
　2.　同　上
図版7　第2区
　1.　調査区北部
　2.　同　上
図版8　第2区
　1.　ＳＫ－1遺物出土状況
　2.　同　上
図版9　第2区
　1.　ＳＫ－2
　2.　同　上
図版10　出土遺物
　1.　ＳＫ－401(1)、第3層(39)出土土器
図版11　出土遺物
　第3層(13)、第4層(25)、包含層(34)出土土器
図版12　出土遺物
　包含層出土土器
図版13　出土遺物
　石器

挿図目次

図1　貝塚市遺跡分布図
図2　調査地位置図
図3　調査地地区割図
図4　調査地概略図
図5　基本層序模式図（第2区）
図6　第2区遺構配置図
図7　第2区北側・南側土層図
図8　第1区遺構配置図
図9　第3区遺構配置図
図10　ＳＫ－401
図11　ＳＫ－402
図12　ＳＫ－401(1～4)、ＳＫ－409(5)出土土器
図13　第3層（包含層）出土土器
図14　第4層（包含層）出土土器
図15　包含層出土土器
図16　石器

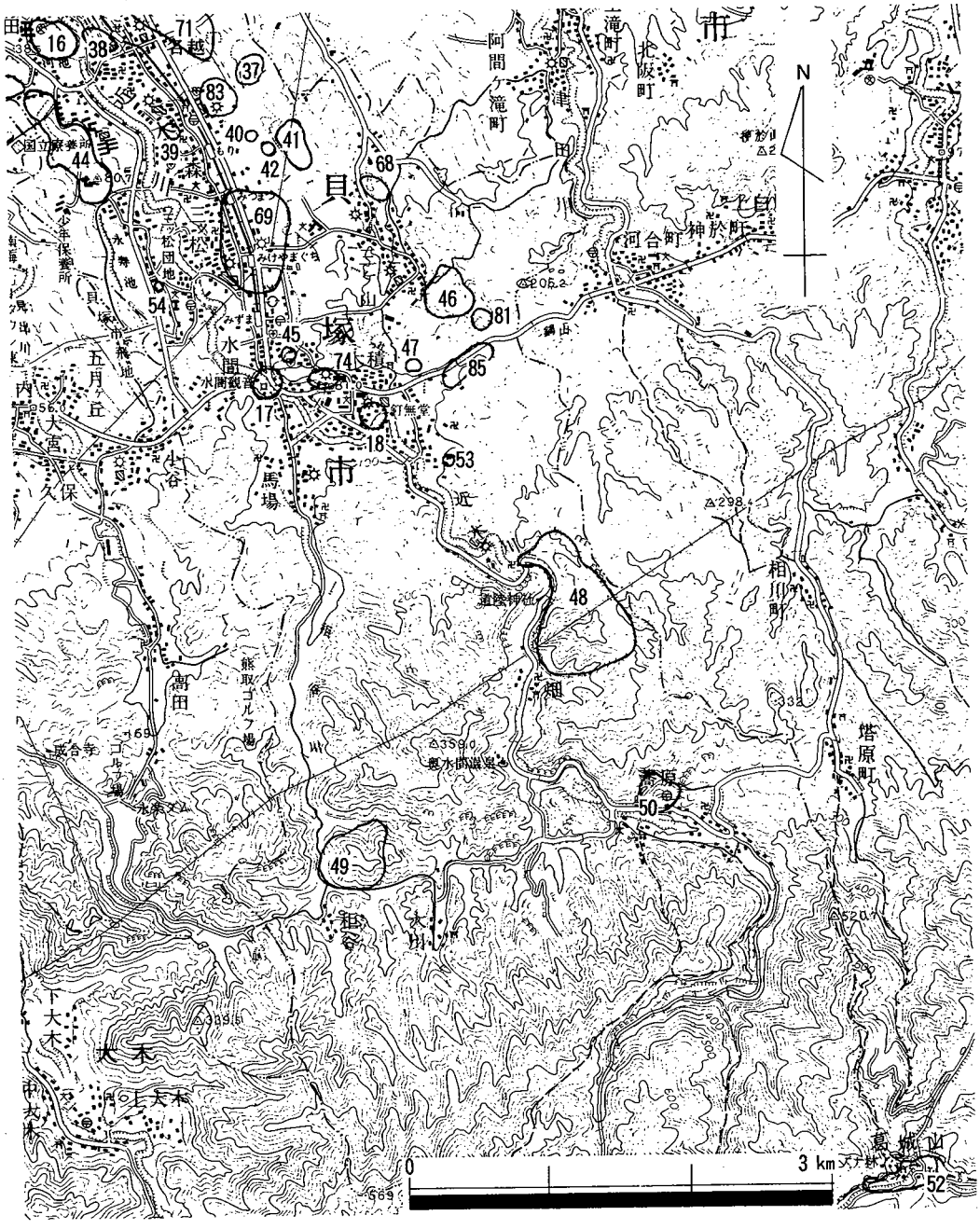
第 1 章　調査に至る経過

貝塚市三ヶ山地内の山中において、約67,000㎡を対象として公園墓地建設計画がもちあがり、貝塚市役所総合計画部開発室、貝塚市土地開発公社より計画に対する埋蔵文化財の取り扱いについて協議の申し入れがあった。

当開発予定地は一部が周知の遺跡三ヶ山城跡にかかるものの、大部分は未確認の地であり、三ヶ山城跡の部分についても調査例等はまったくなく、不明といわざるをえない状況であった。このような状況下ではあったが、開発面積が膨大であることから、開発者と貝塚市教育委員会との間で協議を行った結果、開発対象地において、分布調査、遺跡確認調査を実施したうえで、遺跡等の存在が明らかとなった場合、本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

分布調査は予算等の関係から平成２年５月21日から５月25日にかけて実施した。すでに下草等がしげっているため、遺物の採集は困難をきわめ、土段状の部分は存在するものの、現代に山を削平し、谷部を埋めるなどの大幅な開発（林業、農業）が入っていることが判明した。その結果から確認調査に着手、調査面積 380㎡を設定し実施していった。調査期間は用地買収の関係から２次にわたり、１次調査を平成２年９月３日から９月14日にかけて、２次調査を平成３年３月13日から３月20日にかけて実施した。その結果、開発地東端部の谷部より平安時代の土器が多量に出土し、当地に平安時代の住居地が存在している可能性を確認した。

この結果をもとに、開発者と遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、遺物を確認した谷部において、開発行為によって大きく盛土を受ける部分、遺構等検出できなかった場所ではあるが、谷両側の尾根頂上部分の合計３ヶ所の調査区を設定、約 1,800㎡について本格的発掘調査を実施することの合意をみた。発掘調査は平成３年１月16日から４月28日までの４ヶ月をかけて実施した。



16. 河池遺跡 17. 水間寺遺跡 18. 木積観音寺跡 37. 集原池遺跡 38. 高井天神廃寺、高井城跡 39. 森城跡 40. 森B遺跡 41. 森ノ大池遺跡 42. 森A遺跡 44. 千石堀城跡 45. 水間墓地 46. 三ヶ山城跡 47. 片山墓地 48. 蛇谷城跡 49. 根福寺城跡 50. 蕎原城跡 52. 葛城山頂遺跡 53. 坊城遺跡 54. 三ッ松遺跡 68. 三ヶ山遺跡 71. 名越遺跡 74. 木積遺跡 81. 三ヶ山オニ谷遺跡 83. 森下代遺跡 85. 薬師池西遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

第２章　位置と環境

三ヶ山オニ谷遺跡は、貝塚市三ヶ山地内に所在し、貝塚市中央部に位置する三ヶ山地区の南側丘陵部に位置する遺跡である。

調査地は、丘陵部山間部分に位置する。南側には国道 170号線の通る谷部が広がる。開発地は標高120～150ｍを測り、そのほとんどが山間部分であり斜面を利用して果樹の栽培を行うほかは湧水を有する谷部分を水田として利用する程度でその他の尾根部分、急斜面等は竹林、雑木林となっており、宅地等には利用されない不便な地域といえる。

周辺の遺跡としては、近接して位置する中世城跡の三ヶ山城跡、北に中世の散布地である三ヶ山遺跡、西に中世の散布地である三ヶ山西遺跡、平安時代、中世の散布地である橘池遺跡、南に縄文時代、弥生時代、近世の散布地である薬師池西遺跡、平安時代の寺院跡である木積観音寺跡等が存在する。

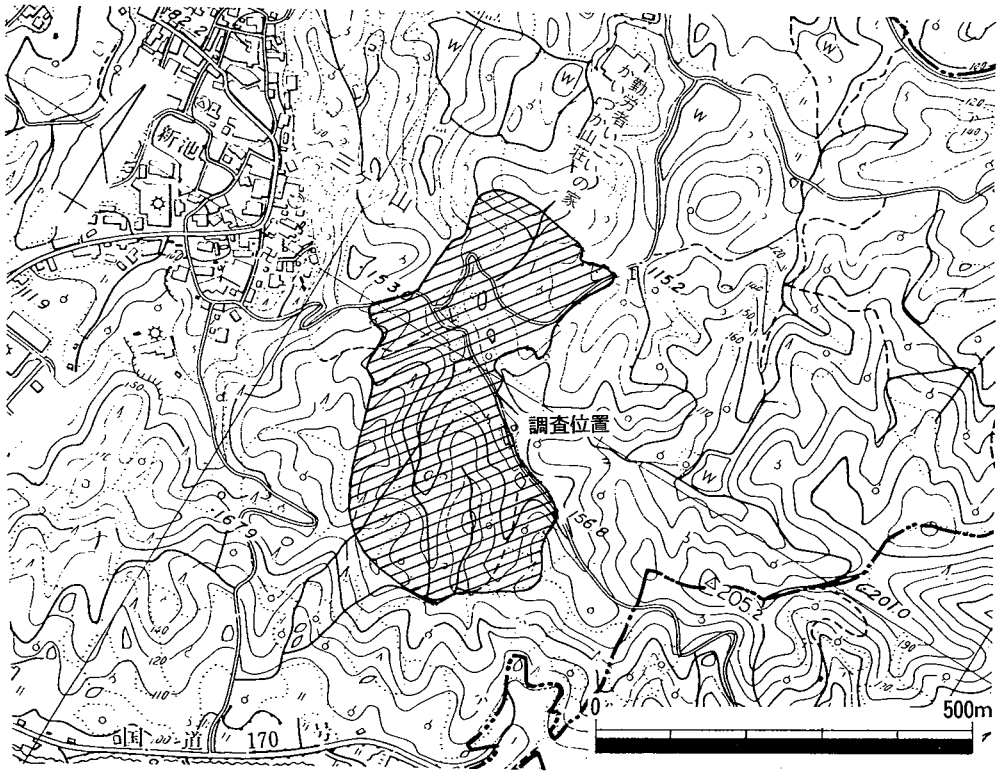


図２　　調査地位置図

近接して存在する三ヶ山城跡は調査がなされておらずその概要については不明な点が多い状況にあり時期的に本遺跡と関係する可能性もあるが今後の調査が待たれる遺跡である。

また、本遺跡の南側に存在する薬師池西遺跡は土地区画整理に伴って発見された遺跡であり、直線距離で 200m程度の距離に位置しておりちょうど本遺跡のふもとに位置している。時代的には合わないが今後、本遺跡との関係が注目される遺跡である。

時代的に最も関係が深いと考えられる遺跡は、木積観音寺跡である。時代は平安時代で距離的には1㎞程度と近く周辺地域の信仰の一核を担っていたと考えられるほか、山岳宗教との関係も考えられ本遺跡を考えるうえでも重要な遺跡の一つである。

次に調査地における道、交通について言えば、調査地は山間部分最奥部に位置し、現代においては一部の土地関係者以外交通量はほとんどない状態にある。また、調査地に最も近い集落三ヶ山地区においてもその交通は土地関係者に限られる傾向にある。その理由として市内海側から山側にかけての主要な道は水間寺に至る旧街道であり三ヶ山地区はその道から外れていること、また貝塚中央線の開通によって市内交通の軸となる道路の整備によって交通の流れが大きく変化したことによるようである。

しかし、以前は岸和田市河合地区に向かう街道があり利用されていたようである。その証拠として道標を兼ねた地蔵が調査地の一角に祭られている。そのルートは三ヶ山地区から調査地谷部を通りぬけるものである。本格的調査を行った地点はこの谷から分岐する谷の奥に位置する。

貝塚市内において開発されにくい丘陵部分の調査はほとんど行われていない状況にあるが今後このような丘陵における開発も増加することが考えられ、このような遺跡の空白部分を埋める新しい遺跡が発見される可能性のある重要な地域であるといえる。

第３章　調　査　成　果

1. 調査の概要

開発面積が膨大であることから、まず分布調査を行い開発地の地形状況、開発の状況の確認のほか、遺物の散布の確認等を行い確認調査の基礎とした。

確認調査は重機の入る部分については機械掘削、その他の尾根部・頂上部については人力掘削による調査を実施した。試掘坑は分布調査の際、遺構の存在の可能性があると思われる場所に設定し、２ｍ×10ｍの試掘坑を基本とし機械掘削、人力掘削あわせて 380㎡の試掘坑を設定し、試掘調査を行った。

試掘調査の結果、開発地東端部の谷部に設定した４ヶ所の試掘坑より遺構の検出はできなかったが平安時代の土器が出土し、遺物包含層の存在を確認した。

本格的調査は、遺物包含層を確認した谷部は開発行為によって大きく盛土を受ける部分であったため調査区を設定し、また遺構等検出できなかった場所ではあるが開発行為によって削平をうける谷両側の尾根頂上部分２ヶ所についても調査区を設定した。合計３ヶ所の調査区、約1800㎡について本格的発掘調査を実施した。

東側尾根頂上部に約５×16ｍの規模で設定した調査区を第１区とし、谷部に約15×90ｍの規模で設定した調査区を第２区、西側尾根頂上部に約５×16ｍの規模で設定した調査区を第３区とした。また、調査区において南北を基準とした５×５ｍの区画を用い、東西に22区画を設けＡ～Ｖ、南北に19区画を設け１～19とした。

第１区、第３区の調査の進め方は、表土を取り除き、その下の耕作土および腐植土の掘削の後遺構検出を行った。第１区は主に尾根上を走る農道部分が調査区になっているが一部果樹園、竹林部分も含んでいる。農道をつくる際に整地のために若干の削平を行っていると考えられるが遺構は良好な状態で検出した。第３区は現状が果樹園であり表土および耕作土を有しており、埋設パイプによる撹乱が認められるものの良好な状態でを検出した。

第２区は尾根部から流れ落ちた土が厚く堆積しており遺物包含層上面まで機械掘削を行いその下は人力掘削を行い４面の遺構面を検出した。

また、包含層は谷地形のためＵ字状に堆積をしており掘削にあたっては、層位の確認を行うため、約50㎝の幅で調査区中央とそれに直交するトレンチを設定した。部分的に撹乱を受けている部分が存在した調査区全域において良好な状態で遺構を検出した。

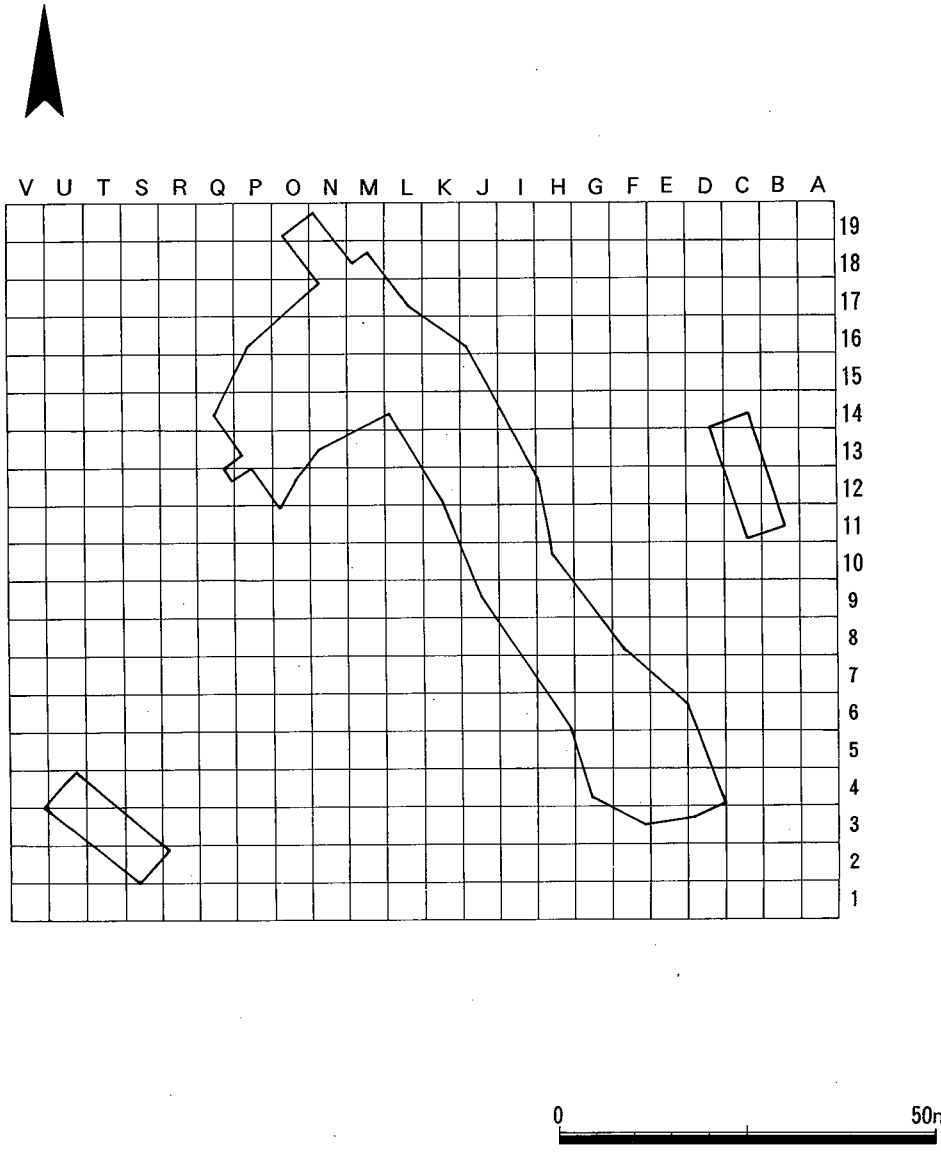
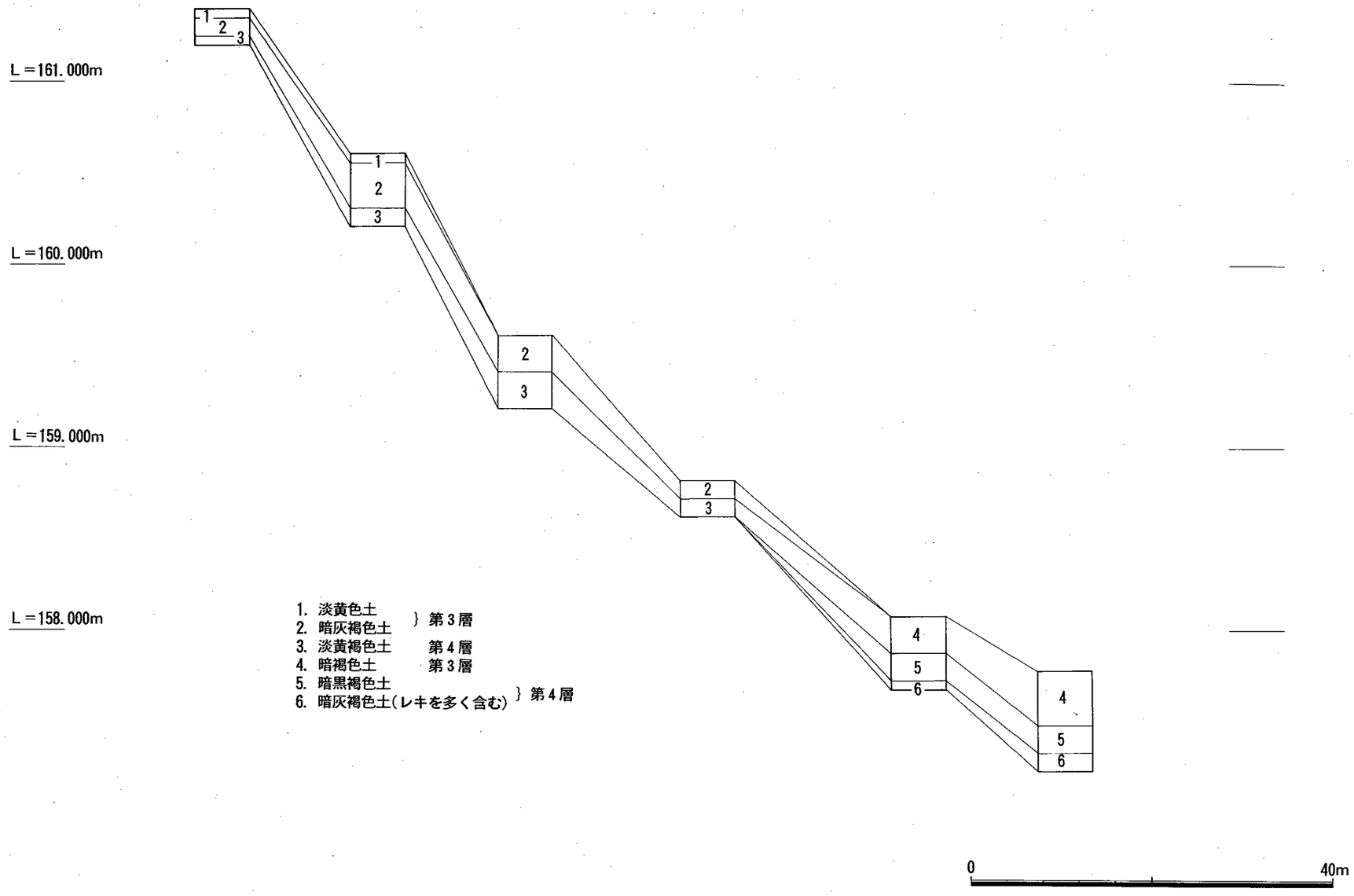

V U T S R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
50m

図3　　調査地地区割図

図4　　調査地概略図



1. 淡黄色土　　} 第3層
2. 暗灰褐色土
3. 淡黄褐色土　　第4層
4. 暗褐色土　　第3層
5. 暗黒褐色土
6. 暗灰褐色土(レキを多く含む)　} 第4層

図5　基本層序模式図（第2区）

2．基本層序（図5）

第1区・第3区については尾根頂上部に位置している。ともに遺物包含層は存在していない。第2区は谷部に位置し若干の耕作土を有しその下に両側尾根部より流れ落ちた土が厚く堆積している。その下に良好な遺物包含層を検出した。

以下各地区について基本的な層序についてその概要を示す。

第1区

現地表面はT.P. 171mを測る。南東－北西方向に長くのびる尾根である。現状が農道、竹林、果樹園部分であり腐植土や耕作土の表土が約20cmの厚さで堆積しており、その下は黄色土の地山および黄色の岩盤の地山である。包含層は検出されていないが、農道をつくる際に若干の整地を行っており表土が削られている可能性もある。

第3区

現地表面はT.P. 180mを測る。南東－北西方向に短くのびる尾根である。現状が果樹園であり耕作土および表土約30cmを測り、その下は黄色土の地山および黄色の岩盤である。包含層は検出されていない。

第2区

現地表面はT.P.162～157mを測り比高差約5mで谷の奥から南東－北西方向に大きく傾斜する。約10cm程度の耕作土の下に両側尾根より流れ落ちた土が約40～50cmの厚さで堆積し、その下に包含層が堆積する。

南側の高い部分は層厚約20cmの淡黄色土（第3層）、層厚約40cmの暗灰褐色土（第4層）が堆積し、その下は黄色土の地山である。

北側の低い部分は層厚約30cmを測る暗褐色土（第3層）、層厚20cmを測る暗黒褐色土（第4層）その下は暗黒褐色土の多く礫を含む層の部分と黄色土の地山である。一部岩盤の検出された場所も存在した。また、谷部分であるためその堆積状況はU字状を呈し谷の中央は包含層が厚く堆積し谷の端部分は包含層が薄く、包含層の検出される幅は12～13mを測る。また、北側西の拡張部分は西側尾根部分からすり鉢状を呈する急斜面となっているがその部分においても若干層厚が薄くなるもののほぼ同様の堆積状況を呈しており地山は谷の端部分で岩盤を検出した。

包含層上面においては耕作に伴う撹乱、果樹および木の根による撹乱を受けている部分があったほか、貯水タンク・埋設パイプによる撹乱を受けている部分が存在した。

3. 検出遺構（図6～図11）

第1区、第3区は包含層が確認していないが、遺構は全地区において検出している。特に第2区は包含層を検出しており遺構も全地区において検出している。

第1区、第3区にて検出した遺構の性格はおもに耕作に伴うものおよび土地の境界にかかわる遺構と考えられるが第2区との関係も考えられる。

第2区において検出した遺構は土坑等の明らかに遺構と判断ができるものと広範囲に遺物を含む包含層とも考えられる遺構の2種類の遺構に分けて考えることができる。

谷部分に位置しているため漸次土が両側の尾根から崩ている状況が考えられそのため遺構面の確認が困難であったほか、遺構の埋没も漸次おこっておりそのラインの確認に苦慮した。

以下検出遺構について地区ごとにその概要を示す。

ＳＫ－401（図10）

本遺構はＥ－6区にて検出した土坑である。直径約 0.7m、深さ約20㎝を測る。埋土は暗茶褐色土で炭化物を含む。谷部中央からやや東にずれる場所に位置しており炭化物を含んでいるが火を受けた形跡はない。遺物は黒色土器Ａ類椀、土師器小皿等の平安時代後期に位置付けられる土器が集まって出土しており、何らかの祭祀にかかわる遺構と考えられる。

ＳＫ－402（図11）

本遺構はＪ－12・13区にて検出した土坑である。平面は卵型を呈しており長軸2.1m、短軸1.2ｍ、深さ1.2ｍを測る。焼土、炭化物が層をなしており土坑底部に一段深い部分を有する。出土遺物は縄文時代に位置付けられる石鏃が出土しているが包含層からの混入の可能性が高く直接の関係は薄いものと考えられる。焼土や炭化物の状況から火を燃やしたことは確実であるがどのような目的でつくられた土坑であるかは、不明である。また、出土遺物は石鏃以外出土しておらず詳しい時期は確定できないが他の遺構と同様に平安時代後期に位置付けることができるのではないかと考えられる。

ＳＸ－401

本遺構はＧ－6・7にて検出した性格不明遺構である。直径 0.7m、深さ約20㎝を測る。埋土は暗黒褐色土で炭を多く含んでおり、火を燃やした遺構であると考えられる。遺物は出土していない。

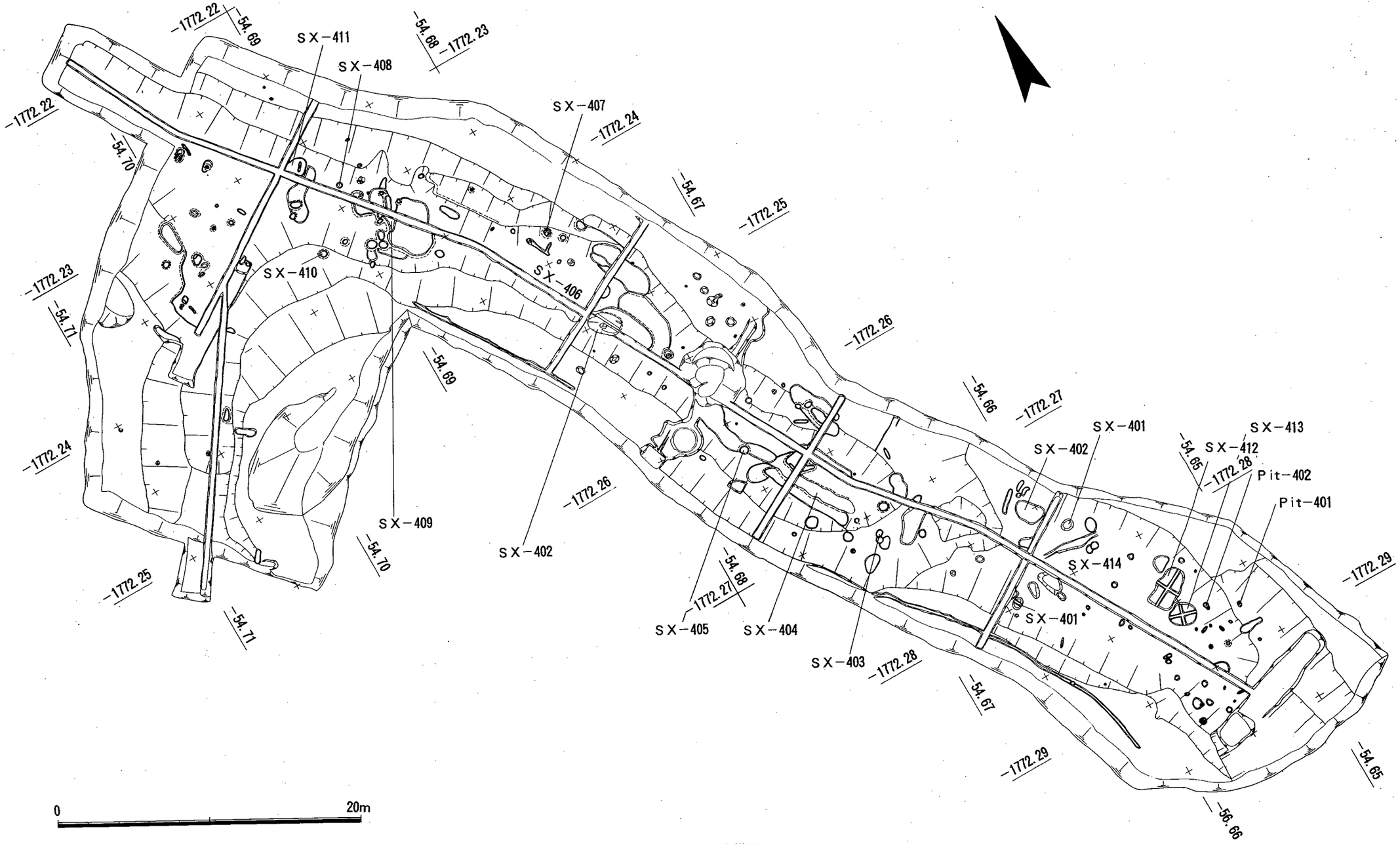
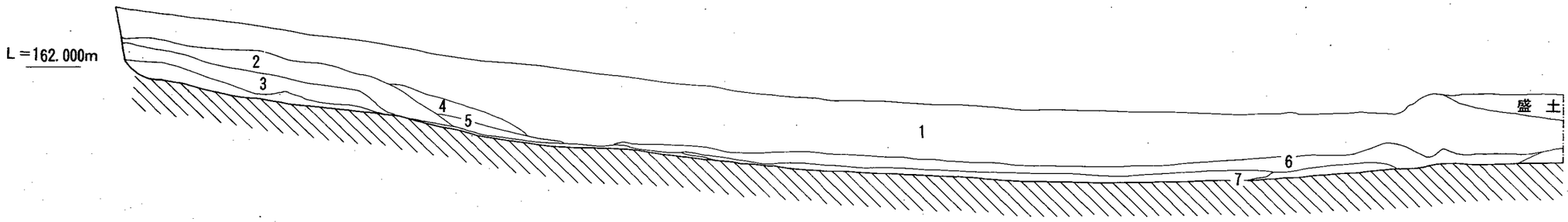

SX−411
SX−408
SX−407
SX−410
SX−406
SX−409
SX−402
SX−405
SX−404
SX−403
SX−401
SX−402
SX−413
SX−412
Pit−402
Pit−401
SX−414
SX−401
−1772.22
−54.69
−54.68
−1772.23
−1772.22
−54.70
−1772.24
−54.67
−1772.25
−1772.23
−54.71
−1772.26
−54.69
−54.66
−1772.27
−54.65
−1772.28
−1772.24
−1772.26
−54.70
−1772.25
−54.71
−54.68
−1772.27
−1772.28
−54.67
−1772.29
−1772.29
−54.65
−56.66
0
20m

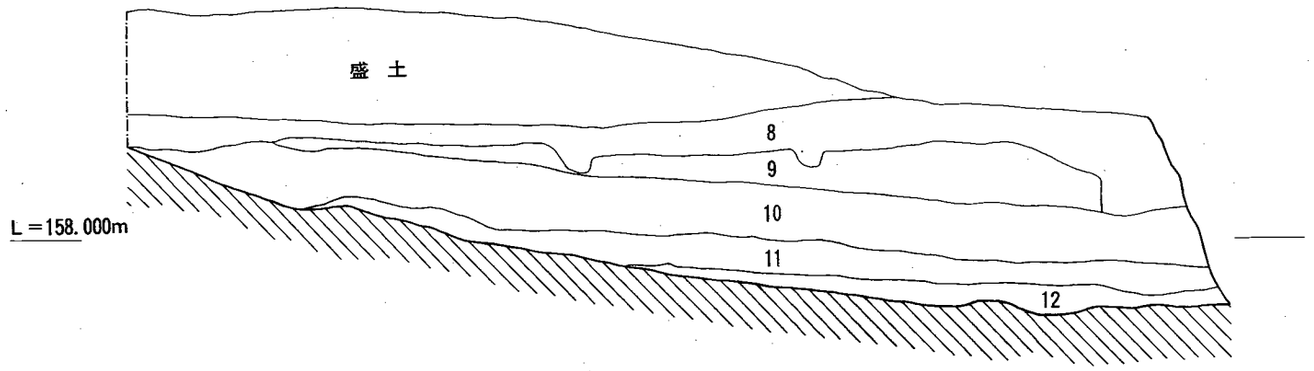
図6　第2区　遺構配置図



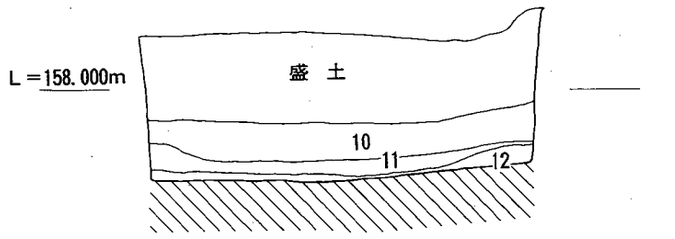
〈南側土層図〉

1. 淡茶黄色土
2. 淡黄灰色土
3. 淡赤黄色土
4. 淡黄色土
5. 淡黄色土（やや赤みを帯びる）
6. 淡黄色土（5と同じ）
7. 淡黄灰色土

} 第3層



〈北側土層図〉



8. 淡黄褐色土
9. 暗黄褐色土
10. 暗褐色土 } 第3層
11. 暗黒褐色土
12. 暗灰褐色土（レキを多く含む） } 第4層

0　4m

図7　　第2区　北側・南側土層図

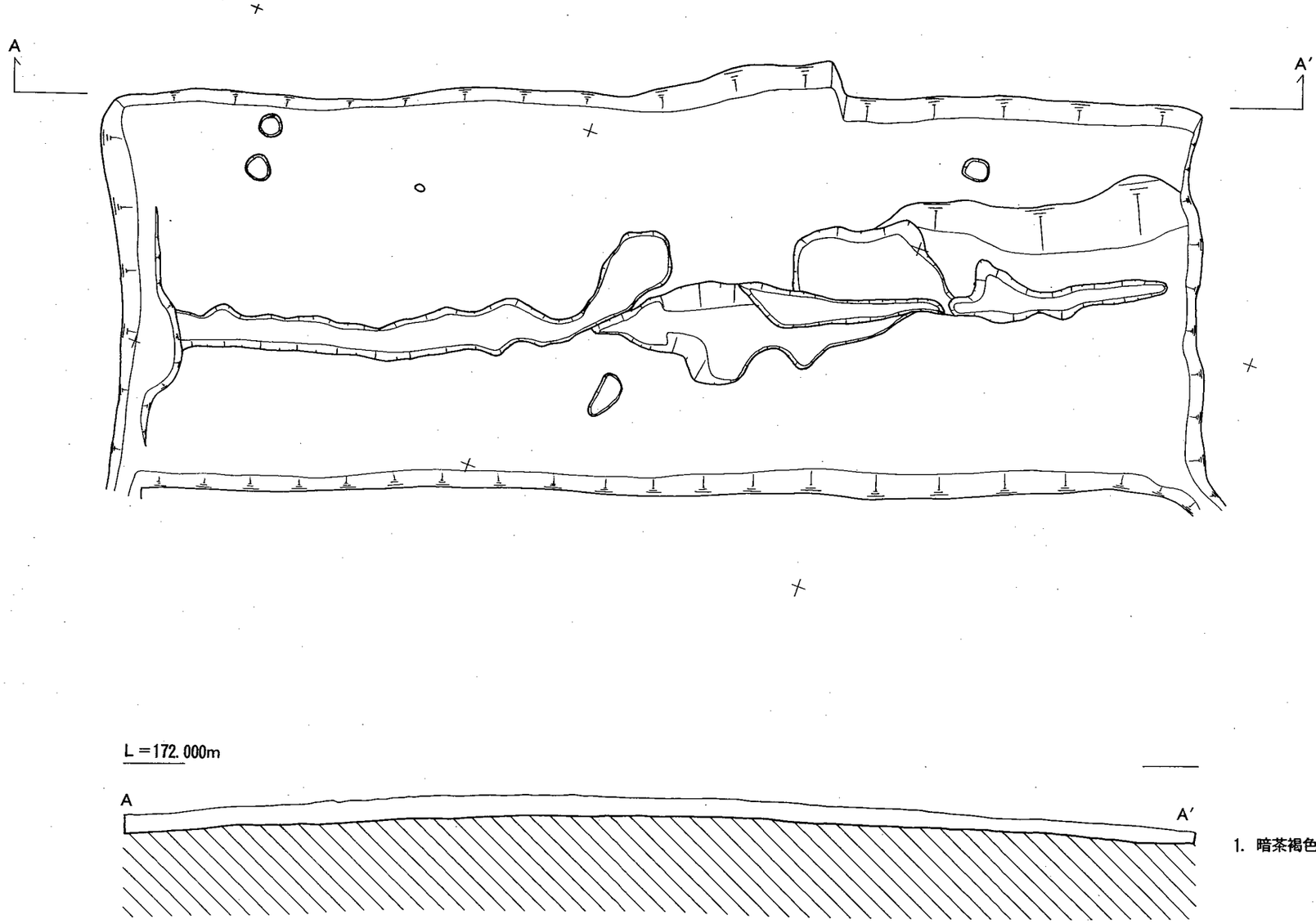


図8　　第1区　遺構配置図

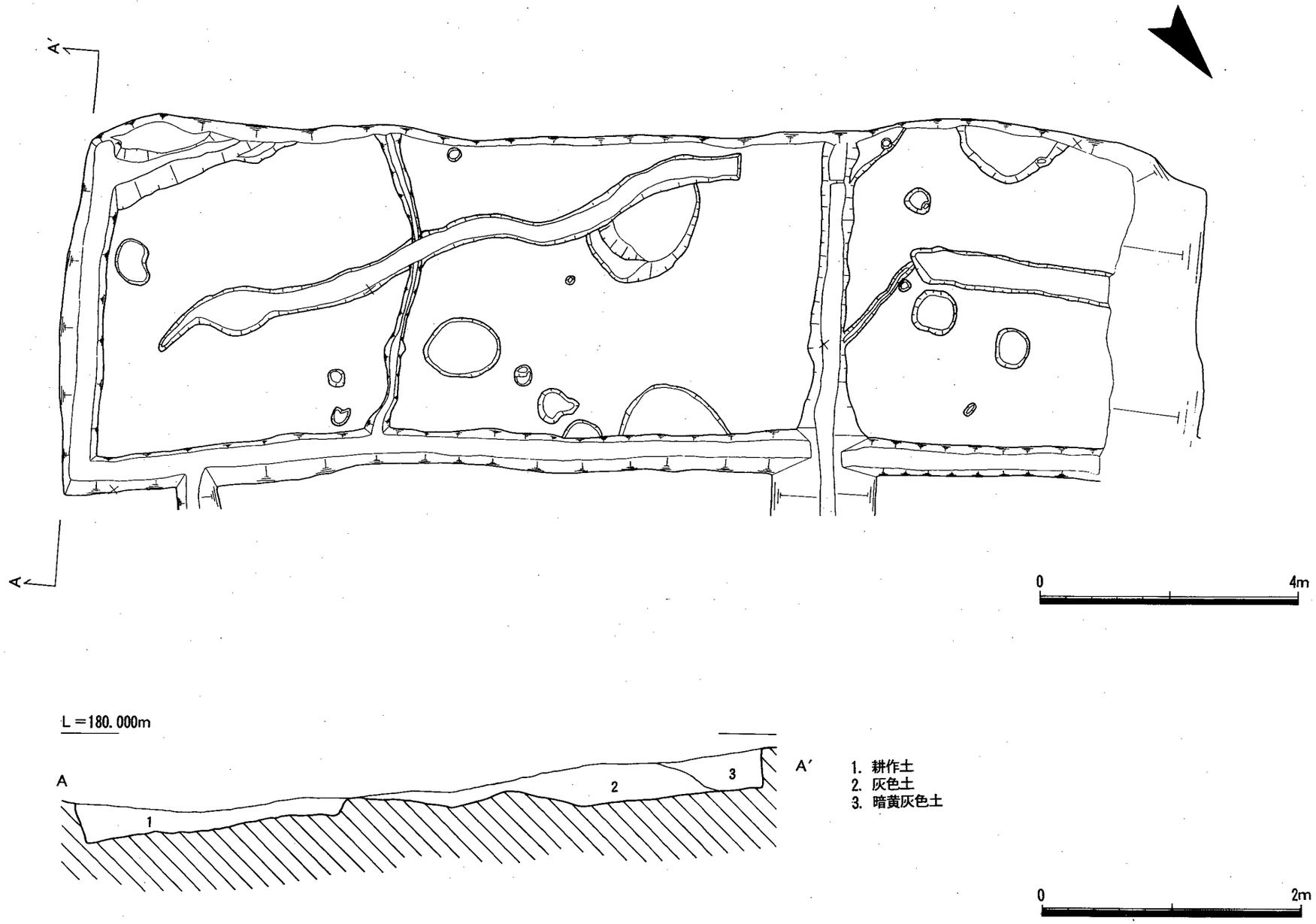


図9　第3区　遺構配置図

SX－402

本遺構はE・F－5・6区にて検出した性格不明遺構である。長軸 1.8m、短軸1m、深さ約10cmを測る。埋土は淡黄褐色土で、出土遺物は土師器片である。

SX－403

本遺構は、H－8区にて検出した性格不明遺構である。長軸 0.5m、短軸 0.3m、深さ約10cmを測る。埋土は淡黄褐色土で遺物は土師器片が出土している。

SX－404

本遺構はI－9・10区にて検出した性格不明遺構である。他の遺構に切られるため全体の規模は不明であるが検出長軸 5.5m、幅 0.8mを深さ約10cmを測る。埋土は淡褐色土で遺物は黒色土器片が出土している。

SX－405

本遺構は、I・J－10区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.5m、深さ約10cmを測る。埋土は淡茶褐色土で遺物は土師器片が出土している。

SX－406

本遺構は、J～L－13～15区にて検出した性格不明遺構である。他の遺構に切られるため全体の規模は不明であるが検出長軸9m、最大幅約2mを深さ約20cmを測る。埋土は暗褐色土で遺物は土師器片が出土している。

SX－407

本遺構はJ－14区にて検出した性格不明遺構である。長軸 0.5m、短軸 0.3m、深さ約20cmを測る。埋土は淡黄灰色土で、出土遺物は土師器片である。

SX－408

本遺構はL－16区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.3m、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色土で、遺物は炭が多数出土している。

SX－409

本遺構はL－15区にて検出した性格不明遺構である。撹乱に切られるため全体の規模は不明であるが、検出長軸1m、幅 0.7m、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色土で、出土遺物は土師器片である。

SX－410

本遺構はM－15区にて検出した性格不明遺構である。直径 0.3m、深さ約10cmを測る。埋土は暗褐色土で、出土遺物は土師器片である。

ＳＸ－411

本遺構はＬ－16区にて検出した性格不明遺構である。撹乱に切られるため全体の規模は不明であるが、検出長軸 1.8m、深さ約20cmを測る。埋土は暗褐色土で、出土遺物は土師器片である。

ＳＸ－412

本遺構はＥ・Ｆ－６区にて検出した性格不明遺構である。長軸３m、短軸 1.5m、深さ約20cmを測る。埋土は淡茶褐色土で遺物は土師器片が出土している。

ＳＸ－413

本遺構はＥ・Ｆ－５区にて検出した性格不明遺構である。長軸 1.8m、短軸 1.5m、深さ約20cmを測る。埋土は淡茶褐色土で遺物は土師器片が出土している。

Ｐｉｔ－401

本遺構はＥ－５区にて検出した柱穴である。長軸 0.3m短軸 0.2m、深さ約10cmを測る。埋土は淡黄灰色土で、遺物は土師器片が出土している。対応する柱穴は確認されていないが多くのピットが検出されており建物があった可能性が考えられる。

Ｐｉｔ－402

本遺構はＥ－５区にて検出した柱穴である。直径 0.3m、深さ約10cmを測る。埋土は淡黄灰色土で、遺物は土師器片が出土している。対応する柱穴は確認されていないが建物があった可能性が考えられる。

第１区

南東－北西方向に溝状遺構が走っている。竹林が隣接しておりその根の影響も考えられるが、この溝状遺構は、地山の部分を削って連続的に検出されており、尾根上を走ることから道と考えることができる。本調査区は、道部分に位置しているが、車のわだちとは全く関係なく、この道をつくる以前に使用されていた道であることは確実である。また、遺物は出土していないが、この遺構は第２区と関係のある時代まで逆のぼる可能性がある。

第３区

東西方向（谷方向）に溝が走る。深さ約30cmを測り人為的に掘られたもので果樹園の区画、排水の為に掘ったものであろうか。また、北西－南東方向に走る溝を検出した。検出長約10m、幅約 0.2m、深さ約10cmを測る。埋土は淡灰色土で遺物は出土していない。また、調査区中央部に炭を多く含む直径約 0.4m、深さ約20cmを測る炭を含む土坑が検出されており、第２区で検出されている土坑と性格が似ており関係がある可能性がある。

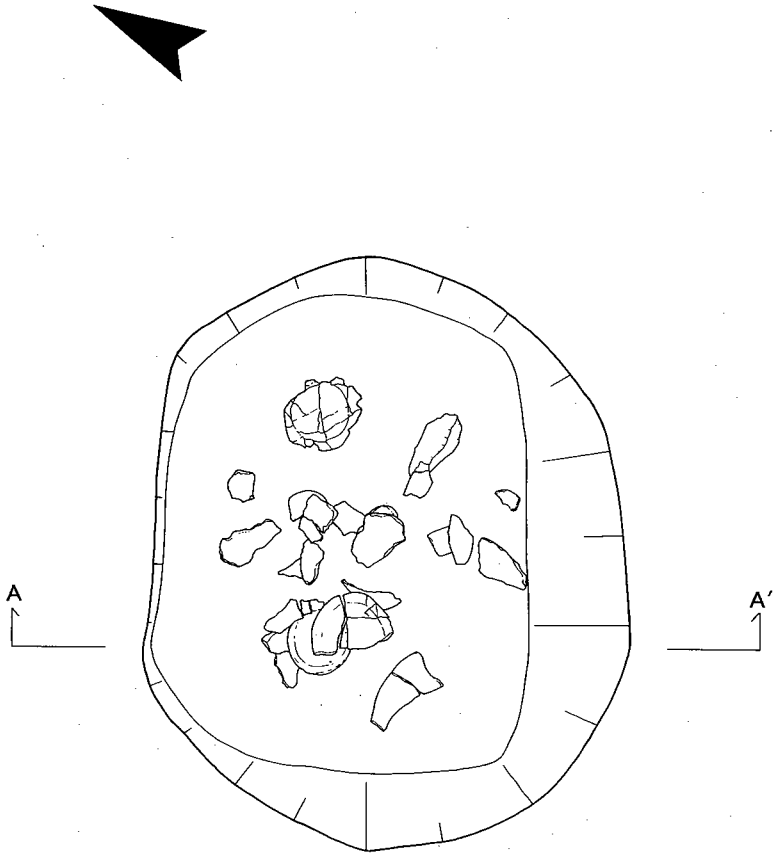
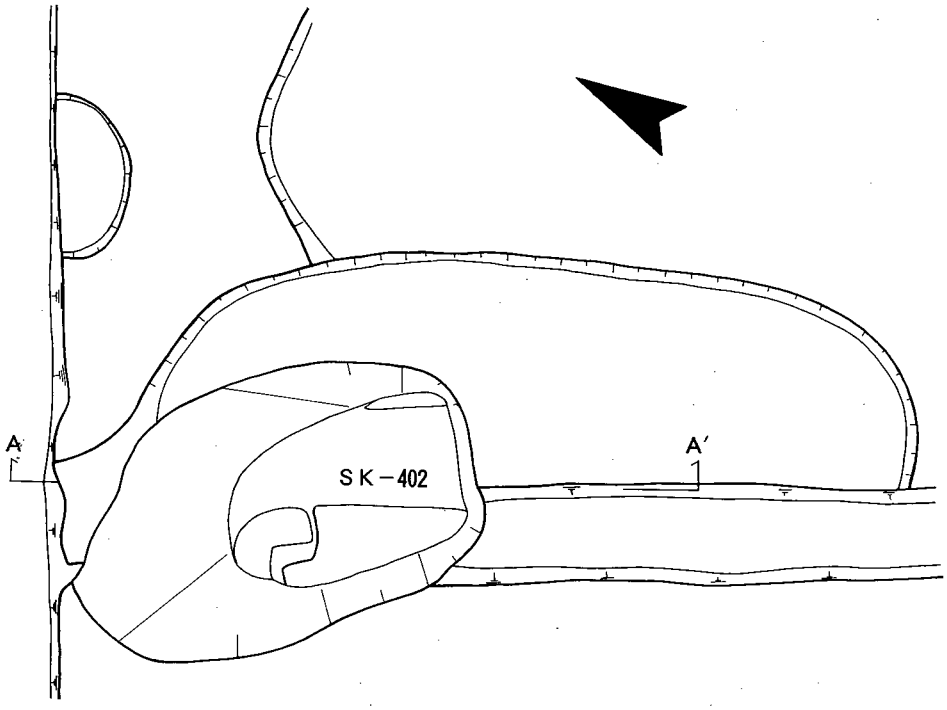
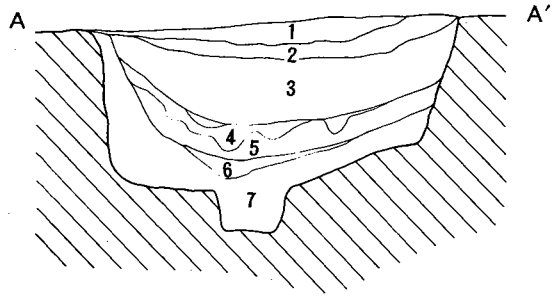


図10　　ＳＫ－401



L＝159.000m



1. 暗灰色土
2. 暗黒褐色土
3. 暗褐色土
4. 黒 色 土（炭・焼土混じり）
5. 赤茶色土（焼土）
6. 赤茶色土（焼土）
7. 暗褐色土（炭を多く含む）

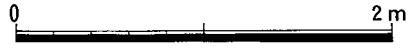


図11　　SK－402

4. 出土遺物

本調査では主に平安時代から中世にかけての土器が出土している。特に黒色土器、土師器が多く出土している。そのほかは、石器およびサヌカイト片が出土している。なお、第1区、第3区からは遺物は出土しなかった。

以下第2区出土の遺物について概要を示す。

ＳＫ－401（図12、図版10）

1～3は土師器小皿である。

1は口径 9.8cm、器高 1.7cmを測る。ほぼ完形で口縁端部をナデで仕上げ、外面底部に指オサエ痕を有する。2は、復元口径12.4cmを測る口縁部片である。器壁は摩滅が激しい。口縁部は、端部でへこみを有する。3は、復元口径 9.4cm、器高 1.7cmを測る。底部はやや薄く口縁部に向かって外方に立ち上がる部分でやや厚くなる。外面底部に指オサエ痕を有する。

4は、復元口径 8.4cmを測る黒色土器Ａ類椀口縁部片である。内面にミガキを施す。

ＳＫ－409（図12）

5は復元口径14.8cmを測る土師器甕口縁部片である。頸部は、くの字状を呈し口縁端部は面をもつ。

第3層（包含層）出土遺物（図13、図版11）

6～8は黒色土器Ａ類口縁部片である。

6は復元口径15cmを測る。外面端部付近、内面にミガキを施す。7は復元口径10.8cmを測る。内面にミガキを施す。8は復元口径 6.9cmを測る。外面底部付近に指オサエ痕を有

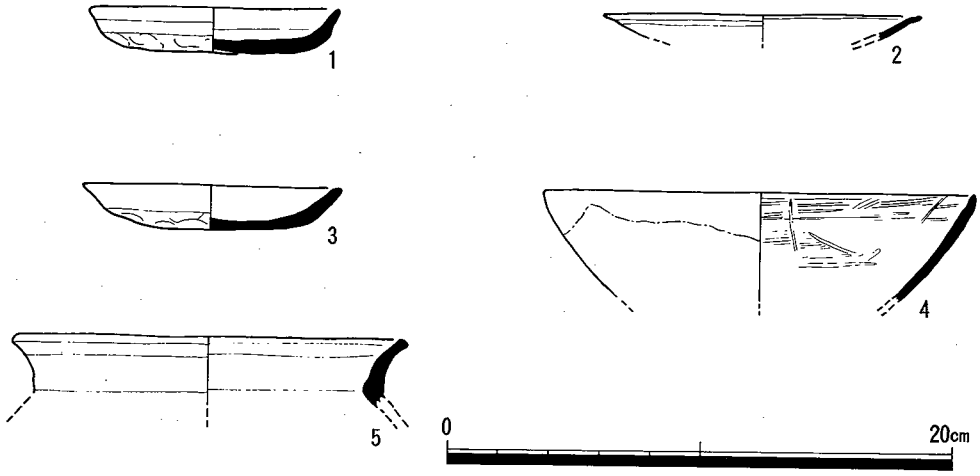


図12　ＳＫ－401(1～4)、ＳＫ－409(5)出土土器

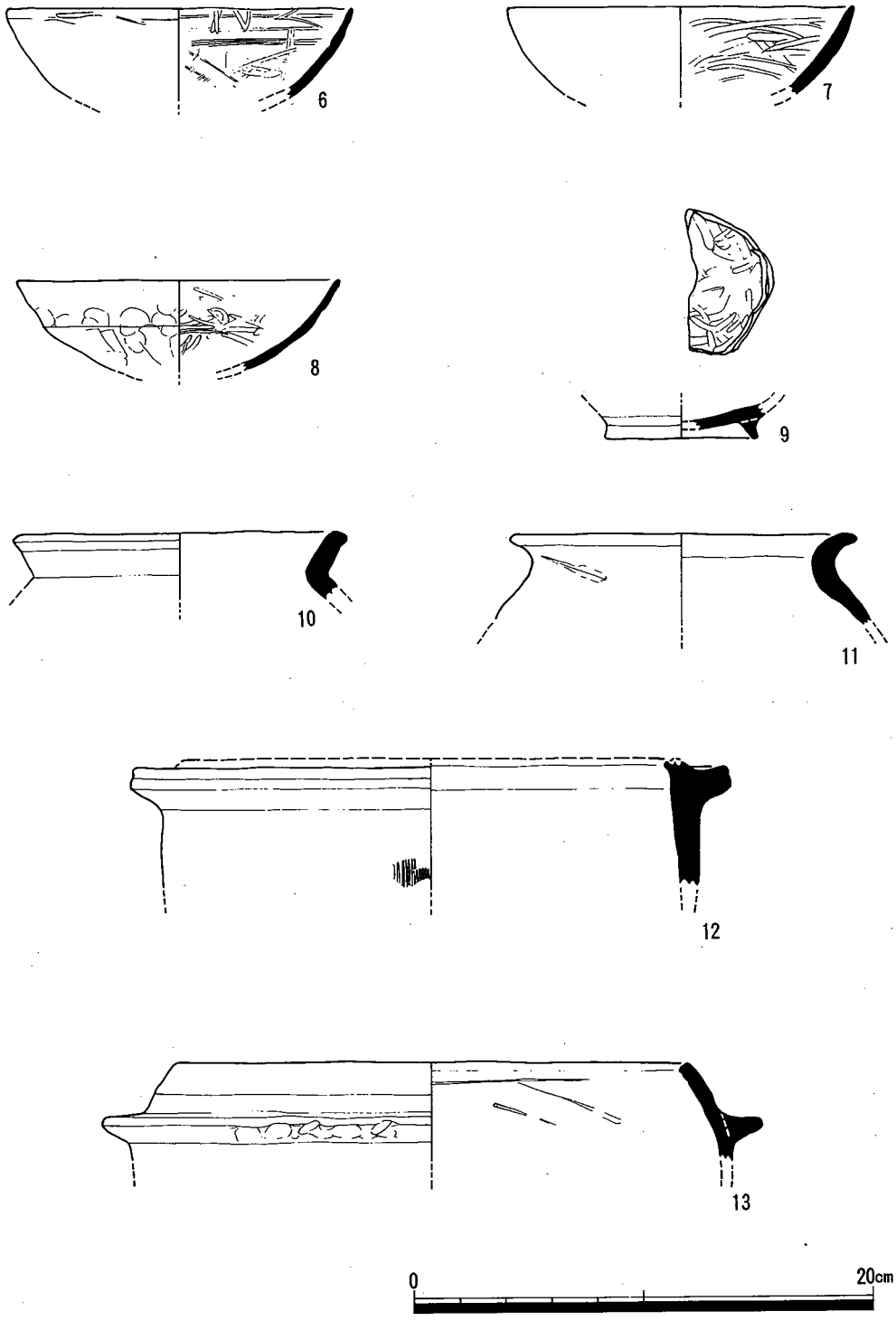


図13　第3層（包含層）出土土器

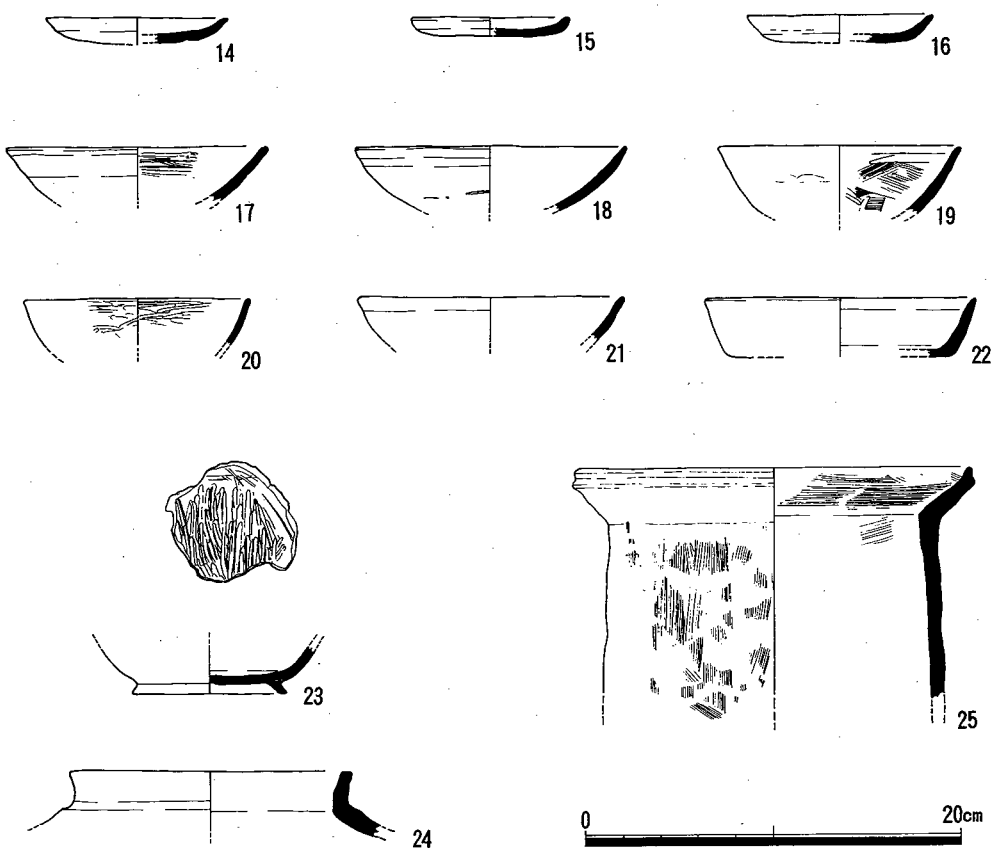


図14　第４層（包含層）出土土器

し、内面にミガキを施す。

９は復元高台径 6.4cmを測る黒色土器Ａ類底部片である。高台は貼り付けでナデで仕上げる。内面にミガキを施す。

10・11は土師器甕口縁部片である。

10は復元口径10.4cmを測る。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり、口縁部にナデを施す。

11は復元口径13.8cmを測る。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり大きく外反し、口縁部にナデを施す。

12は復元体部径20.4cmを測る土師器土釜片である。鍔部より上は欠失している。鍔部はやや上向きの断面方形を呈する。外面にハケメを施す。

13は復元口径22.2cmを測る瓦器羽釜片である。鍔部より下を欠失している。鍔部は貼り付けで外面に指オサエ痕を有し、やや上向きの断面台形を呈する。

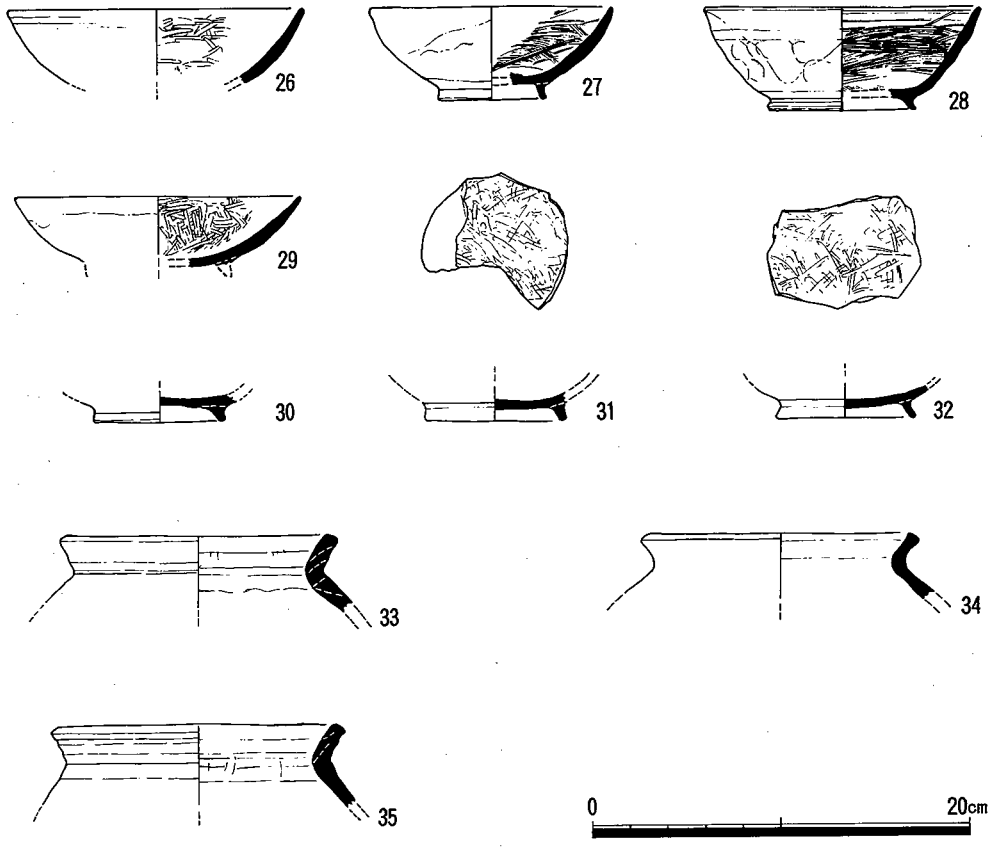


図15　包含層出土土器

第4層（包含層）出土遺物（図14、図版11）

14～16は土師器小皿である。

14は復元口径 9.4cmを測る。底部からゆるやかに外方に立ち上がりを端部で外方に曲がる。15は復元口径 7.8cmを測る。底部から短く立ち上がり端部を丸くおさめる。16は復元口径 9.8cmを測る。底部から外方に立ち上がる。

17～19・23は黒色土器A類椀である。

17は復元口径13.4cmを測る。口縁端部をナデで仕上げ、内面にミガキを施す。18は復元口径14.2cmを測る。19は復元口径12.2cmを測る。内面にミガキを施す。体部外面に指オサエ痕を有し端部にナデを施す。

20～22は瓦器である。20は復元口径11.6cmを測る瓦器椀口縁部片である。外面口縁部付近、内面にミガキを施す。21は復元口径13.8cmを測る瓦器椀口縁部片である。22は復元口径14.2cmを測る瓦器である。器種は不明である。底部は高台を伴わない平らなものと考え

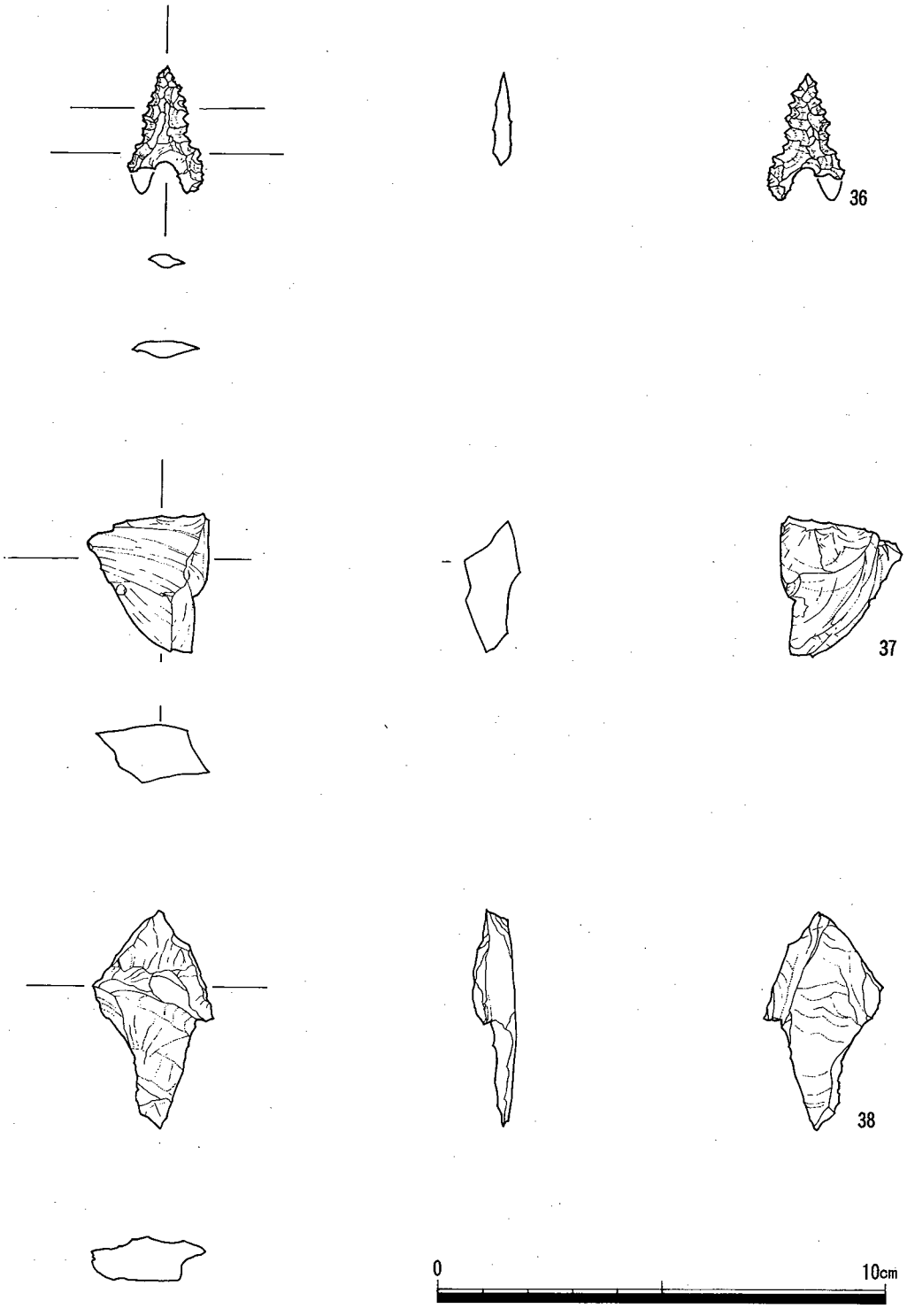


図16　石　器

られ底部から外方に直線的に立ち上がる。

24は復元口径14cmを測る土師器甕である。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり端部に面をもつ。

25は復元口径20.8cmを測る土師器甕である。胴部はほぼ直立して頸部で曲折し外方に立ち上がり端部は上方につまみ上げる。外面に縦位ハケメ、内面口縁部に横位ハケメを施す。

包含層出土遺物（図15、図版11・12）

機械掘削、中央トレンチ掘削等で出土した明確に層を特定できない出土遺物についてその概要を示す。

26～32は黒色土器Ａ類椀である。26は復元口径15.4cmを測る口縁部片である。外面口縁部付近、内面にミガキを施す。27は復元口径12.6cm、高台径 5.2cm、器高 4.9cmを測る。内面にミガキを施す。28は復元口径14.4cmを測る。高台径 7.6cm、器高 5.5cmを測る。外面体部から底部にかけて指オサエ痕を有し、内面にミガキを施す。29は復元口径14.8cmを測る口縁部片である。内面にミガキを施す。30は復元高台径 6.2cmを測る底部片である。高台は貼り付けで内面にミガキを施す。31は復元高台径７cmを測る底部片である。高台は貼り付けで内面にミガキを施す。32は復元高台径７cmを測る底部片である。高台は貼り付けで内面にミガキを施す。

33～35は土師器甕口縁部片である。

33復元口径14cmを測る土師器甕である。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり端部に面をもち、ナデで仕上げる。34復元口径14cmを測る土師器甕である。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり端部に面をもち、ナデで仕上げる。35復元口径14cmを測る土師器甕である。頸部は、くの字状に折れ立ち上がり端部に面をもち、ナデで仕上げる。

石　器（図16、図版13）

石器はサヌカイト製のもので製品が１点、剥片が６点出土しているその中の主要なものの概要について示す。

36はＳＫ－ 402にて出土した長さ 2.9cm、厚さ 0.4cmを測る石鏃である。

37は長さ３cm最大幅 2.1cm、最大厚 1.1cmを測る剥片である。

38は長さ 4.9cm、最大幅 2.5cm、最大厚 0.9cmを測る剥片である。

第４章　ま　と　め

本調査では、このような山間部において平安時代後期から中世の遺構を検出することができたことは大きな成果である。

第２区についていえば、谷部に位置しているため包含層は谷の形にＵ字状の堆積をみせ、はしほど包含層は薄く中央が厚く堆積するという状況である。

両側の尾根より漸次土が流れ落ちる状況にあり、遺構面がはっきりしないばかりか、遺構の検出についても難しい状況にあった。

地山上面において検出した遺構の中には包含層の範囲を確認できるものについて遺構と同様に扱ったものもある。そのほとんどが焼土、炭化物を含む状況にあり火を燃やした場所を確定できるものは少ないが部分的に炭化物の集中する場所や炭の詰まった小土坑が数箇所確認されている。

このような状況は谷部という限られた場所において生活が行われていたため、火を燃やした場合その炭や灰、燃焼によってできる焼土の小さな塊が雨等によって流れ広がったということで説明できるのではないだろうか。詳しく、火を燃やした場所についての考察は行っていないがその場所はかなり限定できると考えられ、谷部における生活の場所を考える大きな手掛かりとなると考えられる。

検出遺構は、土坑、ピット等で性格不明のものがほとんどである。その中でも重要な遺構はＳＫ－１、ＳＫ－２である。

ＳＫ－１は、黒色土器Ａ類椀１、土師器小皿３点が重なった状態で出土している土坑である。時期は出土土器から10世紀ごろのものとかんがえられ何らかの祭祀に関係のある遺構と考えられる。

ＳＫ－２は焼土、炭を多く含む埋土をもつ土坑である。燃焼を行っていることはその層の堆積から推測されるが、他の炭の詰まった土坑と規模が全くちがい一番規模が大きく深いもので何度かの燃焼をおこなっているようで、炭焼きのようなことをおこなった可能性も考えられる。

その他の遺構で注目したいのは、調査区南部で検出しているピットである。柱穴の可能性のあるものもありこの地点に掘立柱建物の存在した可能性はかなり高いと考えられる。

また、北部においても焼土、炭化物の集中する場所が存在しこの部分においても何らか

の建物の存在が想起される。

出土遺物から考えると土師器、黒色土器A類、瓦器、石器が出土している。量的には主に黒色土器、土師器が多く、黒色土器椀、土師器小皿、甕、羽釜の出土が多くみられ、瓦器椀、羽釜の出土も認められ、時期的には10世紀ごろから13世紀ごろの遺物が出土している。

しかし、出土遺物の量から考えると瓦器は少量であり、ほとんどが黒色土器、土師器の10世紀ごろに位置づけられる土器で出土遺物は連続的な流れをもって出土しておらず、10世紀と13世紀の2時期に分けて考えたい。

10世紀ころの出土遺物は椀、小皿のほかに甕、羽釜が出土しており羽釜、甕のなかにはススの付着しているものもみとめられ本調査地において生活が営まれていたことが想像される。建物についてははっきりと確認できなかったが、先にもふれたとおり第2区南部または北部において建物の存在した可能性が高い。

それでは、なぜ本調査地に居住し生活を営んだのであろうか。

現在と周辺部の状況が変わらないのであれば第1区の東側の谷部分で湧水地点で存在し水の確保ができるほか、燃料も豊富に存在し、他の集落までの距離も遠くないため生活にはあまり不便な場所ではないと考えられる。

しかし、本地域は地形変化が激しく水田開発や果樹園の開発が遅かったことからもわかるように耕作による生活にはあまり向かない地域であると考えられ、目的は他に考えられる。想像の域を出ないがＳＫ－１にみられる祭祀的、宗教的な目的によって生活が営まれた可能性が考えられる。時期的に関係が考えられる遺跡として本調査地南西部に位置する木積観音寺跡がある。

次に第1区、第3区についてであるが、その目的は開発によって削平をうける部分というだけではなく第2区との関係の遺構が存在する可能性があるために確認の意味で設定したものである。

その結果、第1区においては、中央部に溝状の遺構が確認されその遺構が谷部から尾根に向かう道の可能性があることがわかった。また、第3区においては、耕作地の区画と排水のためと考えられる溝と第2区において検出されている炭を含む土坑と似かよった遺構を検出している。第1区、第3区ともに遺物は出土していないがこのような遺構の発見によって第2区との関係が考えられる。

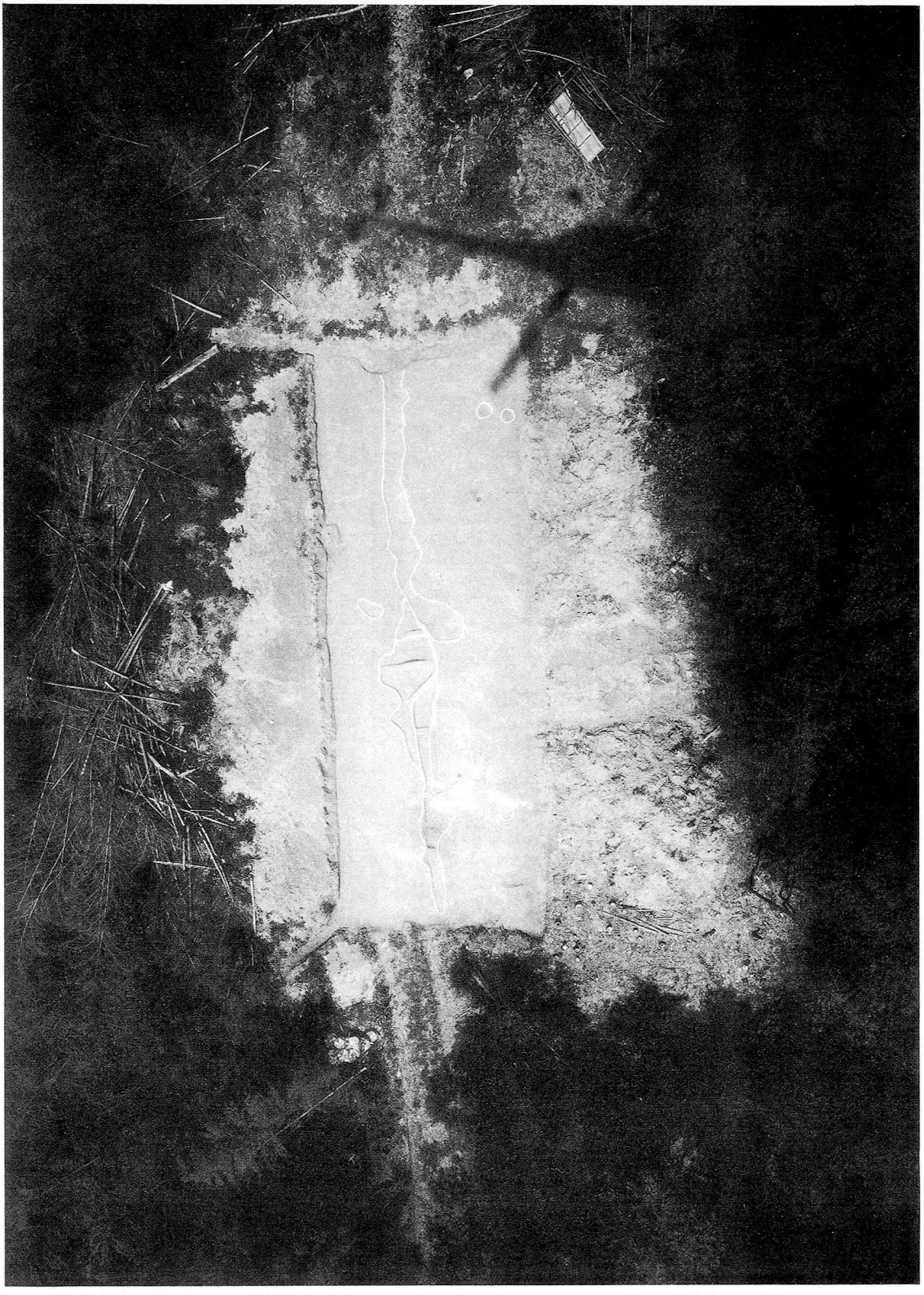
第1区の遺構が道であるとすると尾根頂上部と東側谷部に通じていたと考えられ、第2

区からの通路として利用された可能性が高い。道幅は、約30㎝程度であるが、現在の農道が尾根頂上部に向かってつくられており削平を受けていることも考えられ、もう少し広い可能性がある。

このように調査結果から考えられることは多く、今後周辺地域の調査結果や状況を考え合わせ考察を重ねる必要がある。本遺跡は市内の山間部、丘陵部における遺跡発見を想起させるとともに調査の必要性を大きくアピールする遺跡であるといえる。山間部、丘陵部に位置する遺跡は人の手をあまり受けることなく良好な状態で遺構が保存されている可能性があり貴重である。また、歴史の空白部分の多い地域であるといえる。そのため、開発によって破壊を受けない限り発見されにくいという性格をもつといえる。

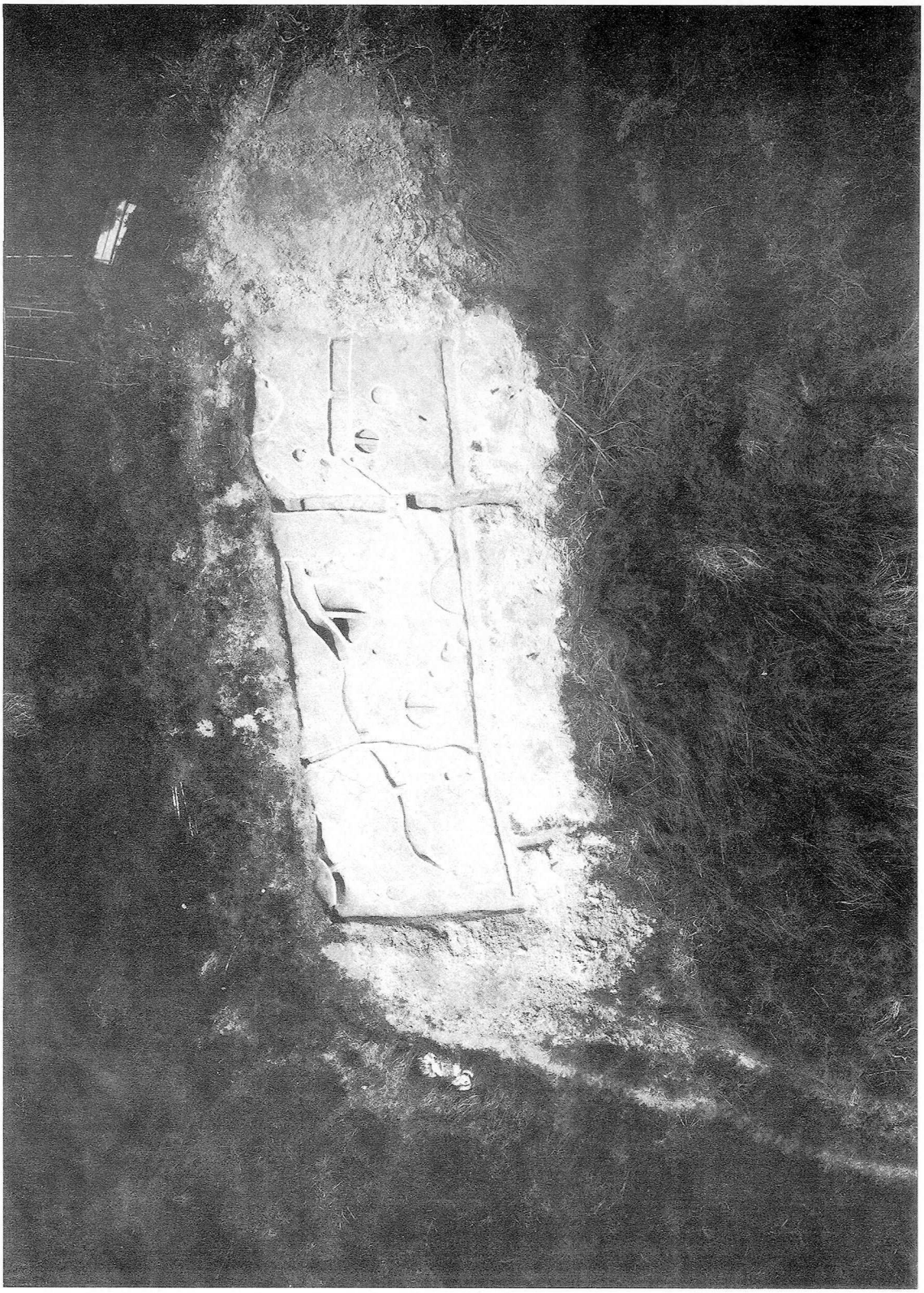
本調査地は開発によって盛土、削平を受ける部分に当たっており調査終了後は公園墓地となる予定である。今後本遺跡のような山間部、丘陵部における開発が行われることが考えられ、遺跡が発見される可能性があり開発に当たっては慎重に対処していく必要がある。

図　　版



第1区全景

第2区全景



第3区全景

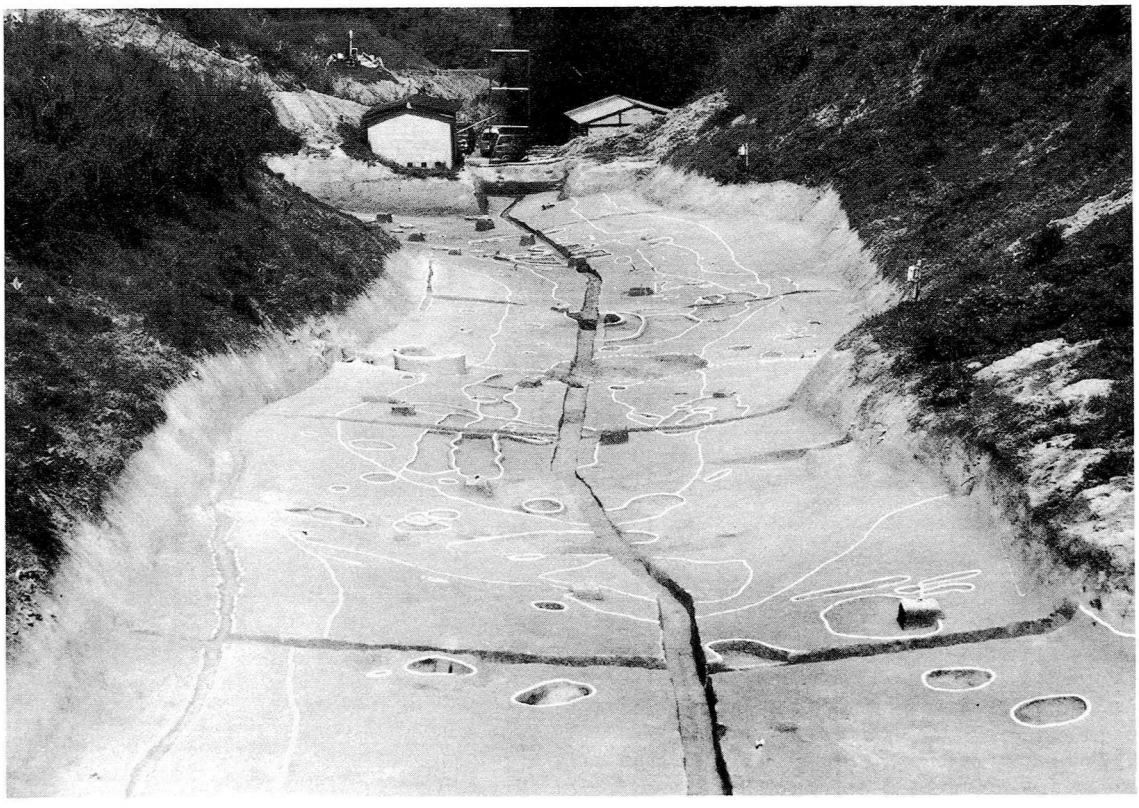
1．遺構掘削状況　　北西より

2．同　上　　南東より

1．遺構掘削状況　　西より

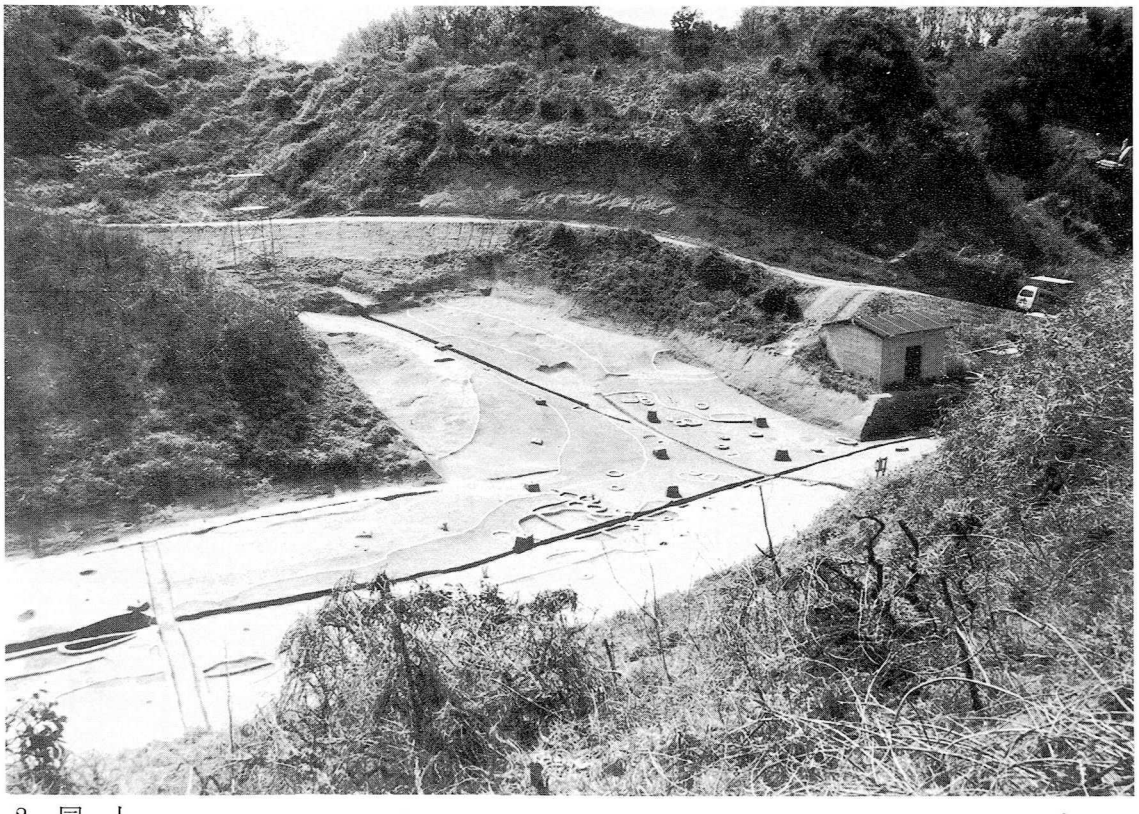
2．同　上　　南東より

1．調査区全景　　北西より



2．同　上　　南東より

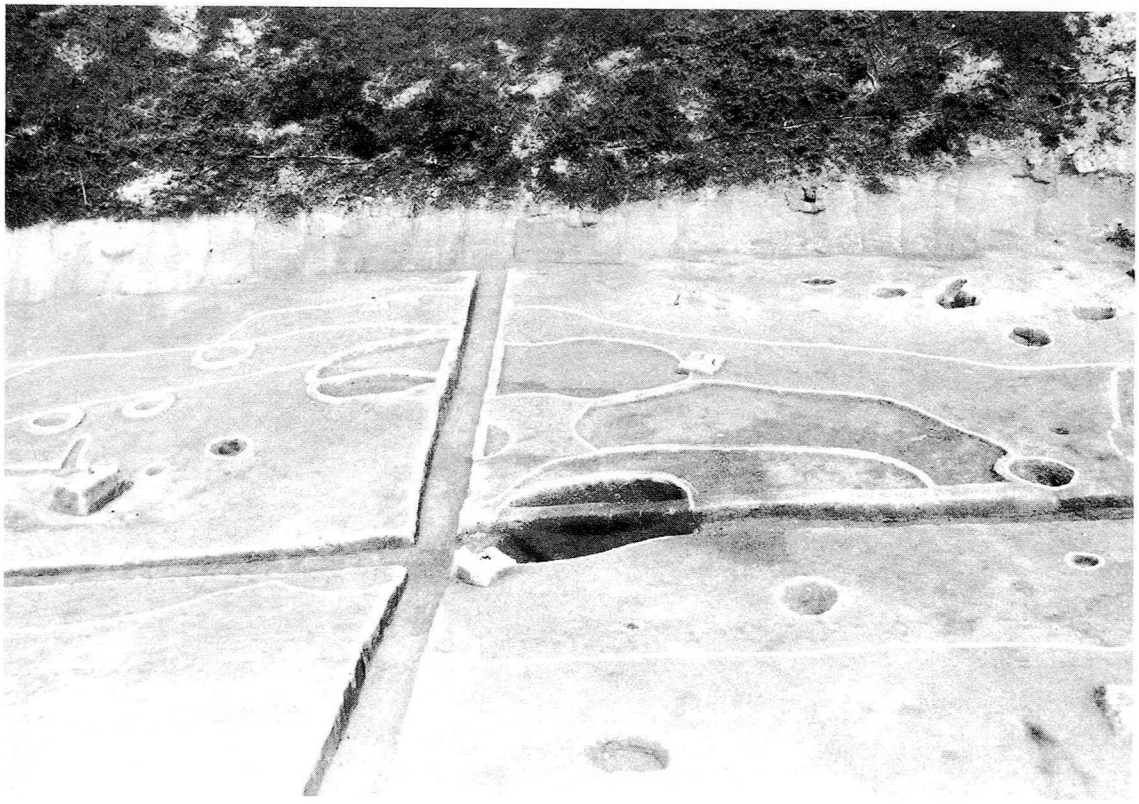
1．調査区北部　　西より



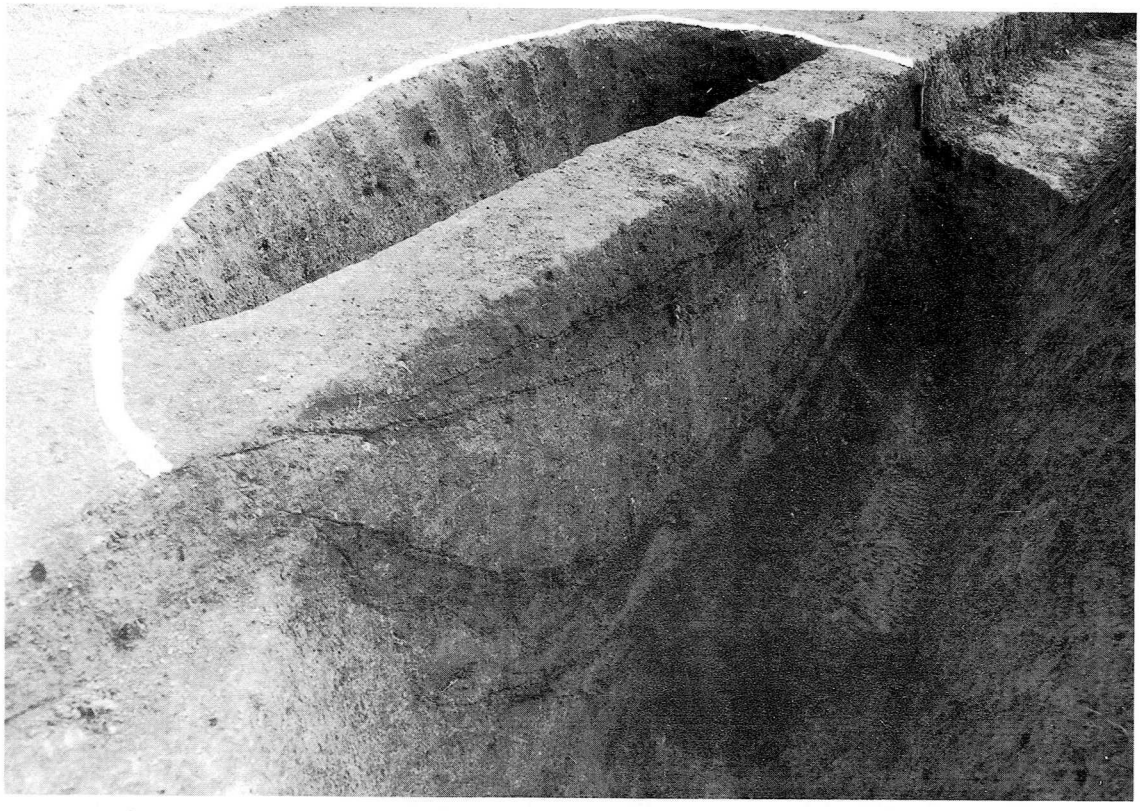
2．同　上　　東より

1．ＳＫ－１　遺物出土状況

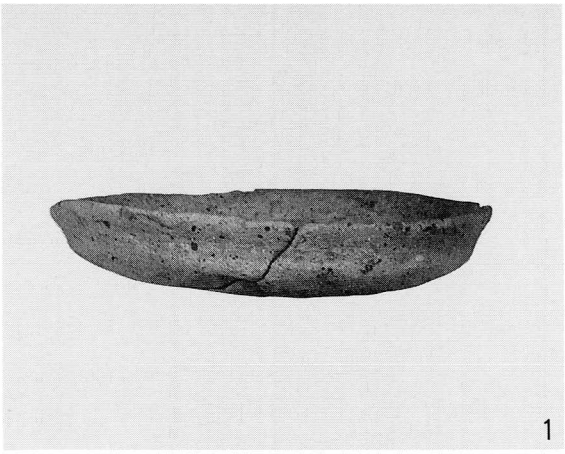
2．同　上

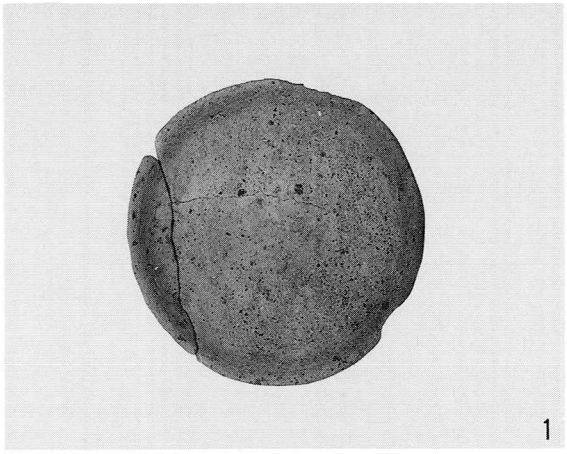


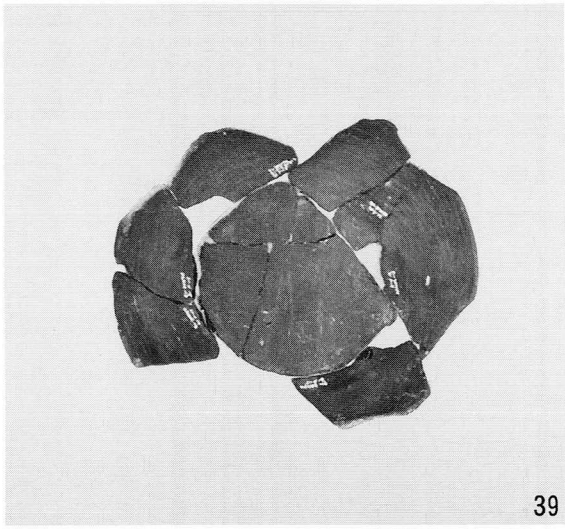
1．ＳＫ－２　　西より

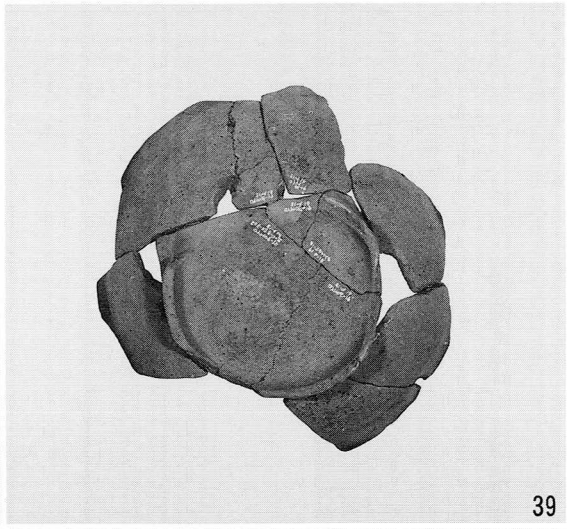


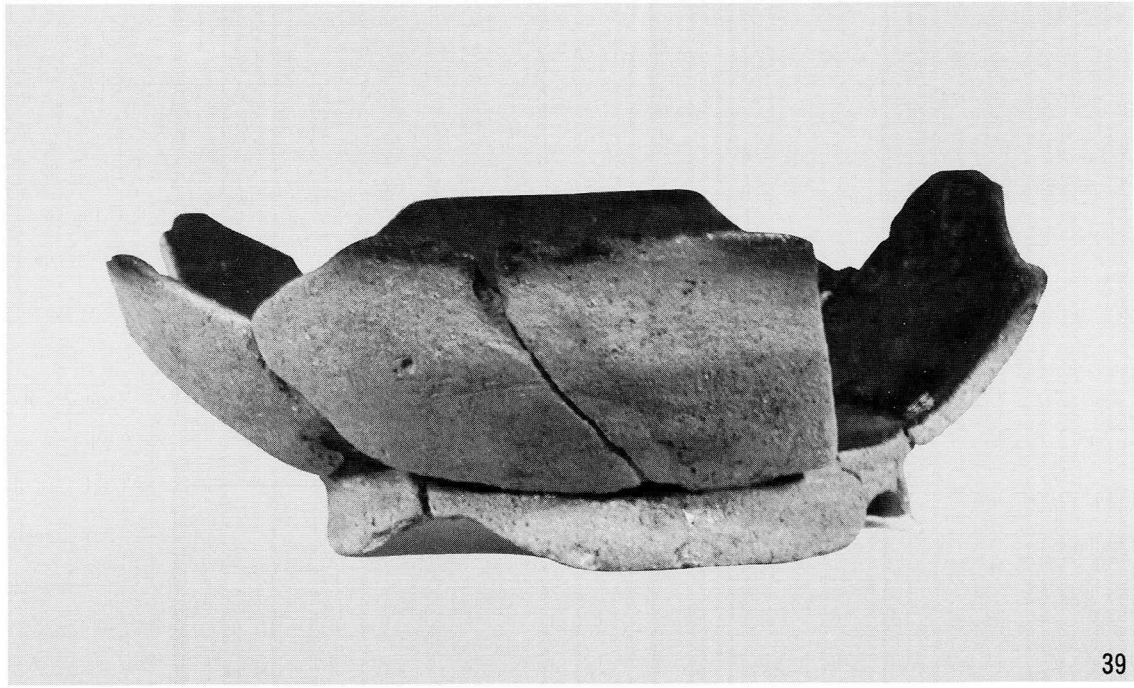
2．同　上


1

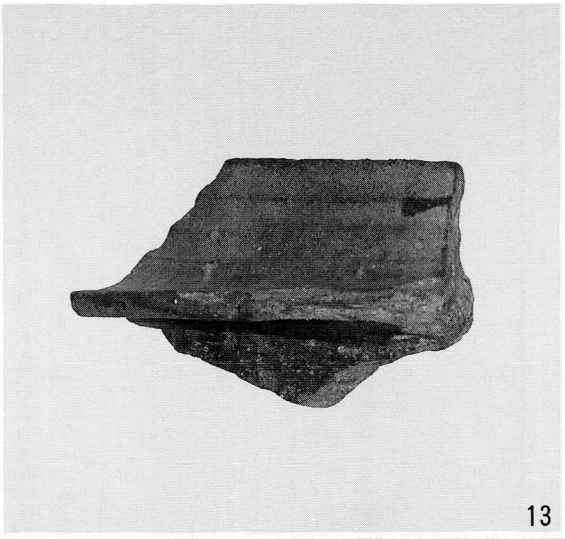

1

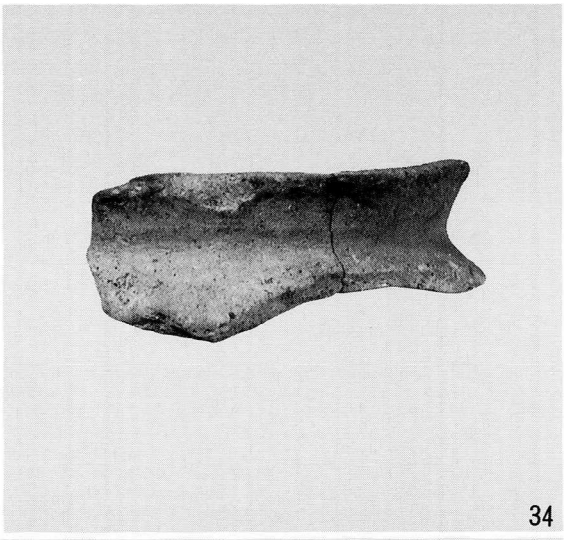

39

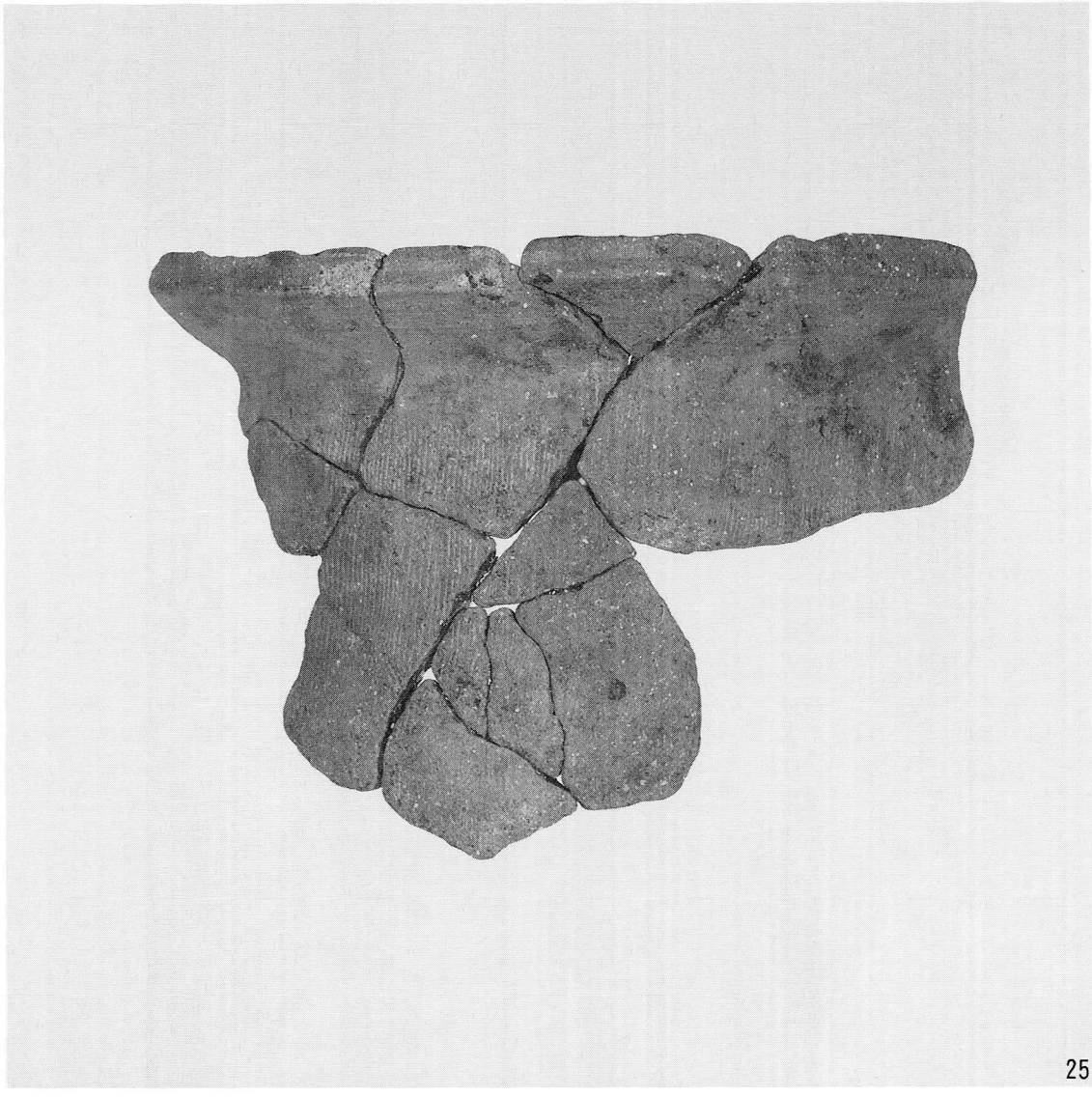

39


39

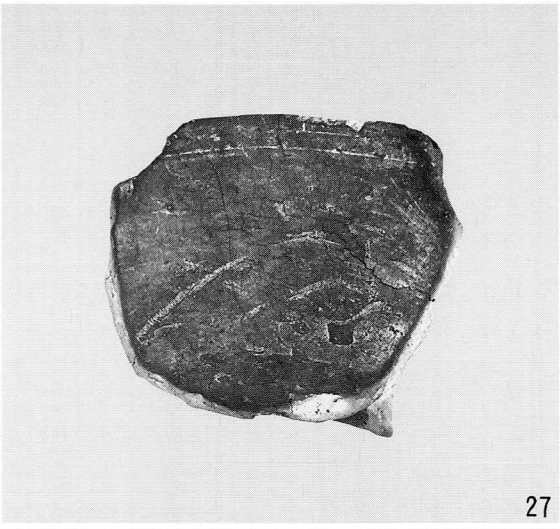
SK－401(1)、第3層(39)　出土土器

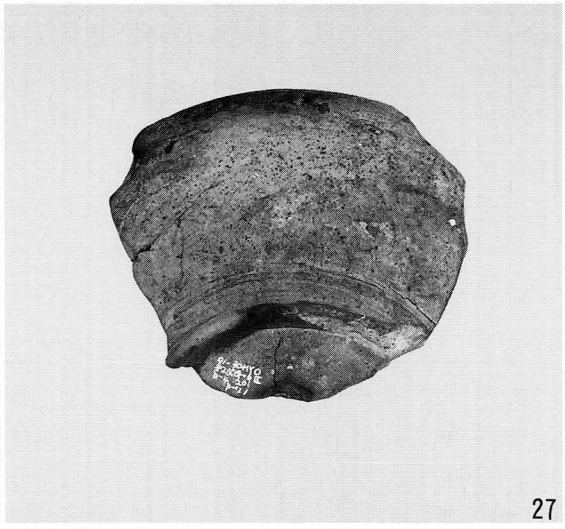


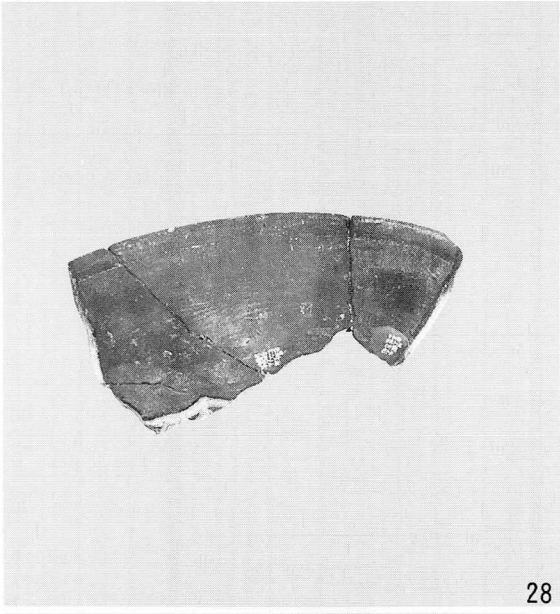




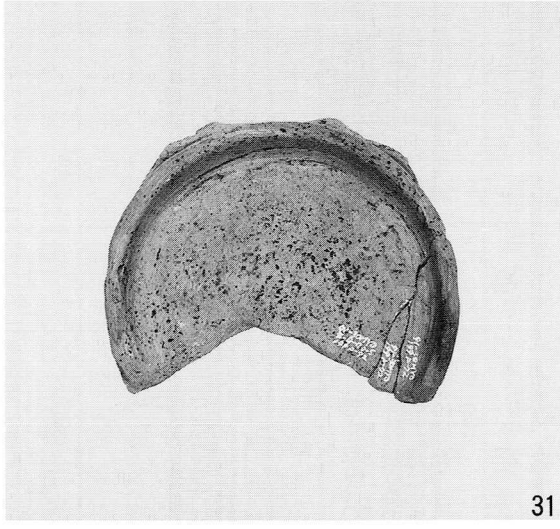
第３層(13)、第４層(25)、包含層(34)　出土土器

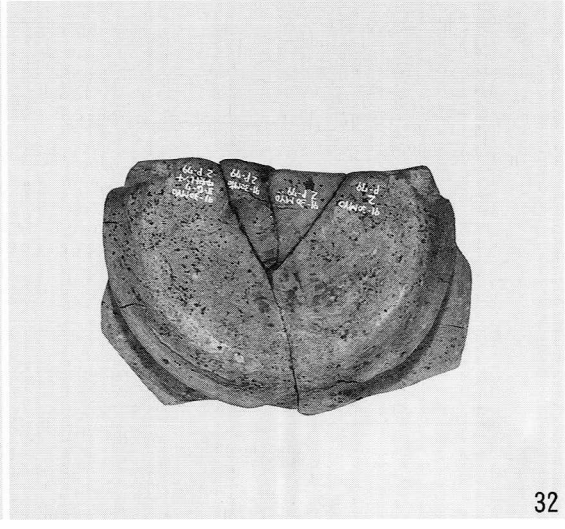

27


27

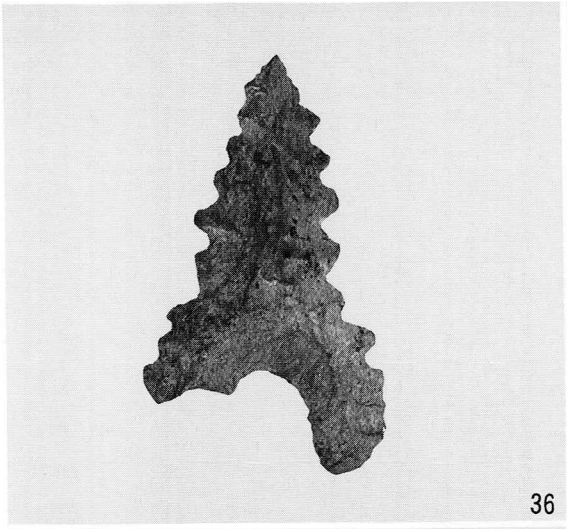

28

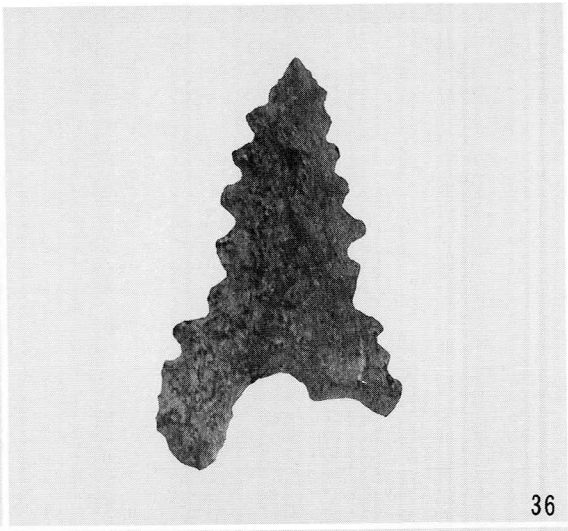
28

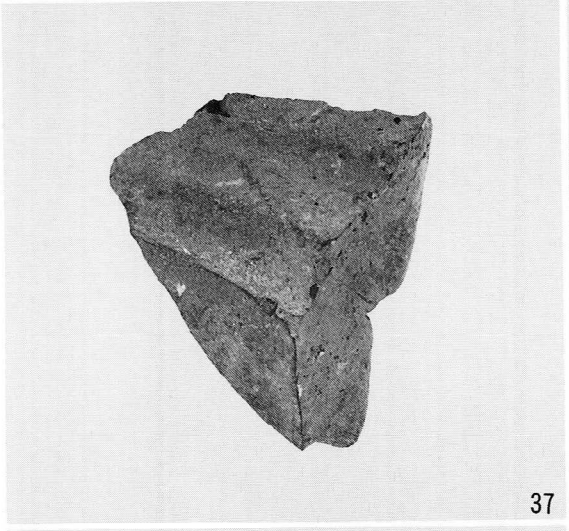

31

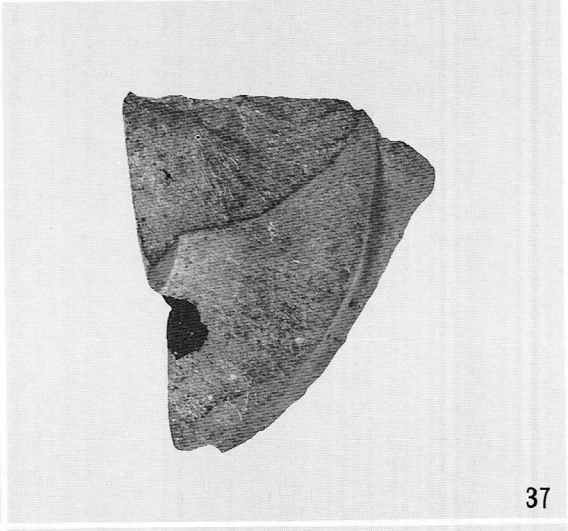

32

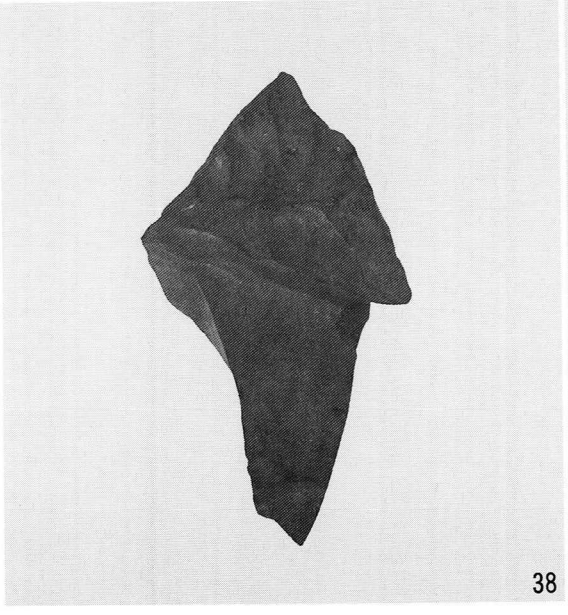
包含層出土土器

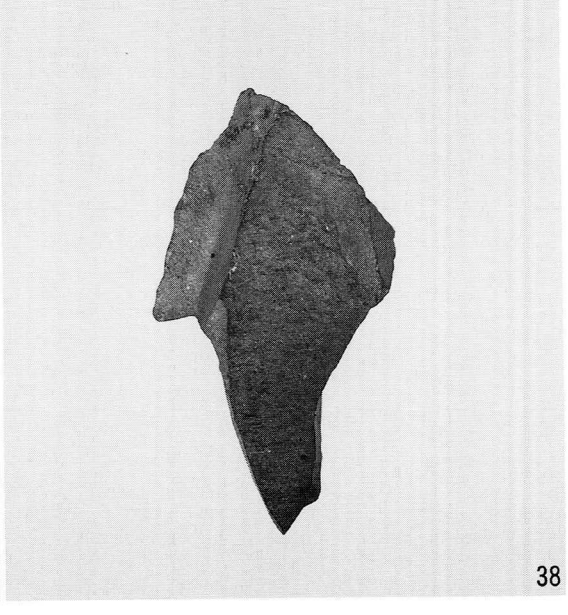

36


36


37


37


38


38

石　器

貝塚市埋蔵文化財調査報告第28集

三ヶ山オニ谷遺跡発掘調査概要

発　行　日　1993年3月31日

編集・発行　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中1－17－1

印　　刷　㈲春木印刷所
岸和田市下野町2－2－8

貝塚市埋蔵文化財報告第28集　正誤表

	誤	正
P 2	下から２行目 68.三ケ山遺跡　71.名越遺跡	68.三ケ山遺跡　69.三ケ山西遺跡 71.名越遺跡
P 5	下から６行目　良好な状態でを	良好な状態で
P12	２行目　第３区は包含層が	第３区は包含層を
	下から３行目　G－６・７にて	G－６・７区にて
P22	下から７行目　逆のぼる	溯る
P27	2行目　貼り付けで	貼り付け後